田野橘治著

暗黑の倫敦

東京 廣文堂書店 藏

自序

予は一個の愚人なり、昨春より昨冬にかけて、漂然として一万三千哩程の旅途にのぼり、上等船客や船員等に、怪しき奴よと、輕蔑せられつ、五十餘日を海上に起臥して、英都倫敦に達したり。

貧乏なる予、愚なる予、無論在英の日本人の笑物たりき、予も又貧乏な友とし、人の笑を愉快と感じて彼等の笑物たるを幸となせり、在英日本人中南京虫と同臥するは予一人なり、予の衣服には南京虫の子孫多く這い居たりければ、日本領事館の運中は、南京虫の親と呼べり、實に笑止なるかな、日本の亡國虫、却て吾が背に這ふ南京虫を笑ふことや。

予は在英中日本人と交するを禁じ、獨り
テニソン街の貧民と共に談笑す、予の樂
は却て此間にありしなり、今予の記する
所は即ち、予の腦中に殘れる一部分なり
去れど予や、愚人なり、其記する所或は意
外のものなきやを保せず、世の君子仁人
よ笑て愚人の記する所を一讀あれ
予在英中有馬頼大人なる人に會し、
非常なるやつかいとなれり去れど此恩
に報ゆる能ず、今此書を公にして大人
の閲覧に供せんとする而已、

明治三十六年六月初旬

東都神樂の割長家

田野橘次

暗黑の倫敦目次

第一章　貧民窟

第一節　貧民町の位置……一

第二節　裏面の光景……三

第三節　貧民窟不平の聲……八

第四節　虚無黨の演説……一一

第五節　勞働倶樂部……一七

第六節　倫敦市の乞食……二一

第七節　婦人勞働者……二四

第八節　貧民町の漫性飢饉……一七

第九節　パブリックハウス銘酒屋……三一

第十節　愛蘭土慘膽の狀況……三三

第二章　地底の倫敦

第一節　貧民窟の起源……三九
第二節　貧民町の天使……四一
第三節　貧民窟の教育……四五
第四節　廚無黨の出版物……四八
第五節　貧民兒童の日本人を罵る通語……五三
第六節　貧民に對する慈善事業……五五
第七節　貧民の友救世軍……五七
第八節　廚無黨との快談……六一
第九節　土地問題と貧民……六五
第十節　貧民窟の犯罪人……七三

第三章　素見物

第一節　赤毛布……七六
第二節　便所問題……八〇
第三節　英國帝人民に下る……八四

第四節　議會の有樣……八六
第五節　ジョセフ、チャンバーレン氏……八九
第六節　倫敦の支那會……九七
第七節　英國の大學校……一〇〇
第八節　家庭の天國……一〇三
第九節　英國婦人の家政……一〇六
第十節　芝居見物……一〇九

第四章　英人氣質

第一節　信仰の國民……一一二
第二節　自助的美風……一一五
第三節　富强の原因……一一六
第四節　沈默せる勞働者……一一八
第五節　相信ずる力……一一九
第六節　結婚の美風……一二一

第七節　体育と衛生……一二三
第八節　優しき交り……一二五
第九節　宗教狂い……一二七
第十節　不文の法律……一二八

第五章　倫敦案内記

一　人口及區劃……一三〇
二　郵便局……一三一
三　上等馬車及乘合馬車……一三一
四　水及瓦斯會社……一三二
五　巡査の數……一三二
六　有名なる建築物……一三二
七　ロンドンの船渠……一三七
八　病院……一三八
九　市場……一四〇

十　博物館……一四一
十一　公園……一四二
十二　畫館……一四四
十三　其他の雜事……一四五

第六章　怒濤一萬二千里

第一節　黑き煙を後にして……一四七
第二節　佛國マルセイルの彌次喜太……一四八
第三節　船内の品評會……一五三
第四節　船客の洋行奇談……一五六
第五節　印度慨慷之客……一五九
第六節　海濤又海濤……一六二
第七節　印度の乞食小僧……一六三
第八節　西洋の俠士邱君……一六五
第九節　嗚呼哥老會の頭目唐才常君……一六六

第十節　醜業婦の世界的運動……一六八
第十一節　三度香港に至る……一七〇
附錄　小慷慨錄
第一節　此鎖沈せる國民……一七二
第二節　日本は盲人國なり……一七四
第三節　此貧乏國を奈何せん……一七六
第四節　滑稽的代議制……一八二
第五節　亂れたる男女の間……一八四
第六節　便所の壁……一八五

暗黑の倫敦目次　終

暗黑の倫敦

田野橘治著

第一章　貧民窟

第一節　貧民町の位置

貧民は都府の東部に住することを好む。此れ實に無意識に生ずる社會上の一現象として、哲學者の一考を要するやも知る可からず、今試に我東都貧民窟の位置を見るに本所、深川、淺草の三區は貧民住居に最も適當の位置として、東市全市を荒す乞食、掏摸、狗盜、放火兒、姪賣婦、畫鳶、板の間稼ぎ、チョックラ持、屑拾、窃盜、掏兒、萬引、などは殆んど此二區の產出

する處あるにあらずや。

倫敦の貧民窟も實にテームス河の以東にあり、通じて此地を東倫敦と云ひ、世人皆東倫敦の住民を賤み、西倫敦の住民を尊敬するの風あり、『貴下の御住居は』と尋ねられし時『私は東部の某町で』と云へば、言はずして先方より其生活の度を推測さるゝ有樣なり、去れは成るべく『西部の何街の何番地』と云を以て非常なる名譽とするは英國一班の風俗と見て可ならん乎。就中東倫敦に於て最も慘憺を極むる貧民窟は、カンニングタウン、ストラツトフード、ポプラ、カストムハウス、イースト、インデヤンドツク、等にして此等の市街は實に倫敦市風俗の病源として府内に流布する渾ての惡習惡俗は實に此所より培養せらるゝものと見て可なり、其裏面を仔細に觀察すれば、惡習惡俗擧げて數ふ可らす、蟠擘姪話は云に及ばず悪

童群をなし、賣姪の周旋所あり、銘酒屋あり、掏兒あり、浮浪人無賴漢無慮數万人なりと云ふべし。

第二節　裏面の光景

爾等は白く塗りたる墓の如しとは基督の万世を觀破したる金言なり、高樓擔を連ぬる倫敦の市街此を見る時は實に美なり、壯大なり、去れども其裏面を觀察する時は、實に百鬼夜行も只ならざる光景を見ることを得ん、予の知れる一人の日本人は、生活の爲にインデヤンドツクの姪賣婦の奴僕として在勤しけるが、一日予の寓に來り姪賣窟の裏面を告て曰く。

私の雇れし家には三人の姪賣婦あり、而して此を買んとて集まり來る惡魔の相手は、伊多利、人獨乙人、佛國人などが多くて、英國人は比較的

に少ない、其來客の種別は多くは水兵水夫として商人は至て少ない。

昨夜の事、一人の獨乙人が遊ばんとて姪窟に來りけるが、其擧動より身なりに鑑定すれば、此は貴族よあらずんば豪商、兎に角東倫敦邊に來るべき身分の人ではあいと見て取た、此客が姪窟に來ると三人の婦人は一生懸命に愛嬌を振り蒔き、接吻をする、抱き合ふ、見られたものではない。

三人の婦人は立ち上り、サア此から飲ませふと促した。

ボヲーイよ、ホイスキーとシャンピンを持て來い、サアサア飲めよ、騒げよ、歌へよ、舞へよと、云ふ有樣よて其一室は恰かも芝居の舞臺の樣に變化した。

チッツ、チッツ、チッツ、トン、チチチトチツトン、チツト、チツト、チ

ツトン、チチチト、チツトン、との大騒き、ピヤノの鳴る音、舞踏の靴音、天地も爲に碎けんばかりの光景であつた、白髮頭の姿が假面を穿つて滑稽を演し出す、而して三人の美人と一人の醉人とは、彼方此方へと躍りつ、はねつ、歌いつ、舞いつ。

ウはは、、、、。

ウはは、、、、。

愉快だ、愉快だ、ウは、、、、。

と云騒きにて、流石の日耳曼のビール瓶も、最早足も腰も立たない樣に泥醉せり、左樣すると一人の姪賣婦は私を手にてまねき、此をペッド、ルームに擔げと命じた、一諾してビール瓶を寢室に運びたり。

三人の婦人は、此室に入り來りて、上着よりヅボンよ至るまで脫がせて

しまい、ビール瓶のためいもなく眠むれるを見て、しすましたりと隱しゝ在る金貨と紙幣約五六百枚をせしめ、何喰ぬ顏にて赤い舌をベロリ、三人共に小躍して其室を立ち去りぬ。

彼女等は私を手招きし、十圓金貨二枚とピストルを渡して曰く、此金貨は汝の効に報ゆる、又此ピストルは、若やの時、ビール瓶を懲嚇する方便ゝ使用せよ、又此所に十圓あれば、此を公番の查公に賄賂として送り來れ、萬事の首尾は、汝が述べずとも查公は既に先刻承知の筈なりと、翌朝ビール瓶は、睡眼朦朧として起き出で來りぬ、三人の婦人は平氣の顏にて、昨夜の支拂を請求した、ビール瓶は、頻りにポッケットを探せども昨夜所持なせし六百圓を見出さない、私を呼で知ないかと尋ねしが、私は知て居ても知らぬと答へた、ビール瓶は、殆ど爲んすべなく

直に電話口に至りて巡查の出張を乞ふた、巡查は直に來りしが昨夜十圓の鼻藥をかいあれば、常に娘等の味方のみする。

ビール瓶か此女子共は盜人だと云ふや、巡查は大喝一聲、令嬢に對して無禮至極な奴めと叱し、彼を縛して警察ゝ引致したのである。

此れ實に淫賣窟裏面の光景なり、夜間ホワイトチャペル邊の横町を散歩せよ、外面は堂々たる令嬢の風を裝れる幾多の白首の往來するを見るべし、彼等はテームス河畔のロハ蛍、又は銀行會社の閉されたる石段などにて淫を賣り、以て僅かに渡世せんとする可憫なる神の子なり。世人今日の文明を贊美して止まず、去れども文明とは、多くの獨身者と多くの賣淫婦を生產するの意味なるか否。予は獨身生活の不自然なるを知と共に、賣淫婦的生活の殊に不自然なるを知る、予は實に歐州の文明中、尙多

くの不自然の行るゝを慨嘆する者なり。

第三節　貧民窟不平の聲

英國の貧民ほど不平の少なきはあし、彼等の自由思想は、佛國、獨乙、伊多利、等の貧民よ比して少しく專制的なり、此れ即ち英國に血の雨の降る如きストライキなく、帝王を射擊する如き無政府黨員の少なき所以ならんか、次に又彼等に不平の少なき所以は、此國貧民の、皆熱心なる宗教家なるにも因せんか、概して基督教は感謝の宗教なり、不平の宗教にあらず、予の佛國マルセイル港に滯在せる時、有名なるマルセイル全港勞働者の大ストライキの起りし時なりしが、恰かも畫にて見し日本の辨慶の如き肥大漢、手よ手に木片を提して港内の彼方此方を横行する樣は、實に腥

氣天地に滿ち、當年のダントン、マラー、ロベスピール、もかくやありつらんと思はれたり、其彼等が石油箱上に登りて、酒氣粉々として勞働問題の演說を試むる樣は、實に佛國の名物にして、英國の勞働者間には見る可からざる光景なりと云ふべし。

斯くも平温なる英國の貧民も、又時として不平の涙を落すとあり。

日曜日よは教會よ行き度いか、衣服が無いので、行かれない、まさかシャツの上に毛布をかぶるとも出來まいしよ、四百四病の其中で、貧ほどつらいものはない、私等は病氣になつても、一封の藥も飲むとか出來ない。食物としてはパンとチースで澤山なれど、其れさえ得られぬ悲しき有樣、西倫敦の方よは一夜に二万三万圓と蕩盡する贅澤家もあるなれど、東の方の吾々と來たら、毎日六錢のパンさえ買ふとが出來ない、

同し人間でありながら、此樣に不同の生活をするとは　實に不思議ではないか。

予の同居せるグランド婆が不平をこねれば隣室より赤襟のパルマルと綽名取たる、無賴漢はヌツと出で。

ムム婆の言最も然りだ、吾々は勞働せざる人は、社會に生存する權のないとは、幼少の時から百も承知である、然るに今日の社會は、遊民にして多くの報酬を受くる者もあれば、生來一事を成さずして贅澤三昧をする人もある、不公平だ不自由だ、不愉快だ、人世とは果して苦痛の意味なりせば、吾々は生れて來る筈でなかつたのだ、此樣な社會よは從順を要せない、破壞を要するのみである、忠義を要せない、反逆を要するのみである、吾々はパンと死を叫ぶの必要を大ゝ感ずる

と說き立てた、グランド婆は赤襟のパルマルの言を次ぎ。

左樣よ、今の社會は、正直一方の吾々には、不適當だ、此はリスの生活すべき社會だ、拘兒の便利なる社會だ、正直なる吾々は、自殺と乞食の外には行く所がないのよ。

不平の聲は實よ改革の聲なり。改革の聲は實に進步の聲なり、不平なき國民は退步的國民なり、予は英國中尙此不平の聲の存ずるが故に、此國の今より、も大に進步することを信ずる者なり。

第四節　無政府黨の演說

一概に無政府黨を以て不眞理となす勿れ、宜しく沈思講究すべし、然れば此の裏に又多くの道理と眞理の包含さるゝことを發見すべし、世界の無政

府黨を大別して、ロシヤ派、伊多利派と大別すれば、ロシヤ派の巨魁はクロパナキン氏なるべく、伊多利派の首領は實に彼のマラテスタ氏なるべし、而して伊多利に尙一派の無政府主義者あり、此は一名基督教無政府黨と云いダビデ氏を推して此が首領と爲す、此一派は其名に示す如く熱心なる神の信仰家にして、平和手段に依りて、現社會を破壞せんとするものなり、予は今予の知れる一無賴漢の談話を記して、以て其一端を傳へんとす。

無政府主義とは、ギリシヤ語よして、其意はウィズアウト、ガバーンメント、即ち政府無しと云ふとで、人が社會を組織する上に、憲法上の權力なきとを言ふなり、今や無政府主義の叫び天下に滿ち、世人一度此聲を耳にすれば、以て國家社會の敵となし、此を嫌厭すること蛇蝎の

如し、ゲニ彼等が斯く思ふも亦無理ならざるなり、先にロシヤ帝を逆殺せるバクニンの一派、又其當時此が參謀たりし女傑ソヒヤ、近くは墺國皇后を黑海の海邊に刺したる一人も、伊多利帝を倒せしも、或は米國の統領マツキンレーを殺せしツヲルゴツツも、同じく此れ無政府黨員の其れありしが故なり。

然れども、吾人何ぞ徒らに殺人を以て業とせんや、其の此の如き擧に出ずる所以のものは、實に萬々已むを得ざるの理由あるが故なり、予等はロシヤ帝に立憲代議制と、言論出版の自由を求めたり、而して帝は頑迷にも吾等の求むる所を容れず、却て吾等の友人を拿捕して此を西部利亞の野に流し、或は直ち劍を以て此を刑す、吾等亦同しく神の子なり、何ぞ暴橫なる一人の爲に、千万人の不幸を見るに忍びん、

即ち蹴起して而して流血の擧に出づる、實に天命と云ふの外なし、吾人は絶對的個人主義なり、吾人の敵は一切の帝國主義と貧民を苦しむる爲めに作られし社團となり、吾人は個人の幸福を充分ならしめんが爲めに、自由と平等を主張するものなり、天は善人よも惡人にも同じく雨露を與へ給ふよあらずや、去ば天の吾人を支配する律令は、完全なる平等たらざる可からず、地上の人權を平等ならしめよ、生存の恩惠を平等ならしめよ、吾人をして吾人を支配せしめよ、吾人の必要に應じて吾人の稅金を拂はしめよ、法律をして全く民意たらしめよ。……

と議論滔々として急流奔河の如く、熱血淋漓として意氣天を衝くものは實に無政府黨員の貧民窟に於ける演說なり。

巨魁マラテスタ氏の人物

時は今より十年前、所は伊多利の一小都府にてありしとなり、府役所の官吏等は、此度軍備擴張の國費欠乏の爲め、新に布かれし徵稅法に依り、其府民に過大の出稅を命じたり、然るに、府民は、年來毎度の納稅にて近來衣食も充分ならぬ折からあれば、到底徵稅に應ずると能はず、屢々代表者を以て租稅の輕減を歎願せり、然るに、民情に暗き官吏等は、頑として其願を許さゞるのみか、金錢なくば汝の衣服を徵發すべしとて、殘酷にも泣き叫ぶ府民の衣服を奪い去れり、當時マラテスタ氏は、其都府に在り、此を見て憤慨に堪へず、即夜十八九名の同志と共に、手套を楯とし、ピストル手斧を振て、府役所に侵入し、官吏を追撰し、集める衣服を人民に歸しやり、且金庫中に在る數万圓の金錢を奪い、集まれる貧民よ散じ且立て叫で曰く、是れなり、是れなり、噫不幸なる貧民諸君

汝は何時迄此殘忍ある主人に奉事せんとするか、と言未だ終らざるに一隊の巡吏來て彼を縛し去りぬ、彼の如きは實に涙ある人と云ふべし。

氏は今年五十左右の偉人なり、彼は主義主張の爲めに一生の過半を獄中に送りぬ今より數年前八ヶ年間の長き獄中生活を終り、現よ英京トツテンナムコー街にト隱る、彼は坐して天下の無政府黨員を指揮し、俠名甚だ高しと雖も、天質甚だ愛情に富み、一度同志の不幸を聞くや、涙下ること雨の如しと云ふ。

彼は一方よはかくも激烈なる主義を抱持すると雖も、他の一面の彼は實に所女の如く、殊に小兒と親み、此遊と戲し、恰かも嬰兒の如しと云ふ彼天下に漂浪して、五十未だ家をなさず、且にして夕のパンを思ず、今日又明日の居所を定むるなし、其無邪氣にして、無慾なるを、實よパラ

ダイスの人民の如し、故に今日英京に在るかと見れば、明日既に巴理よ在り、其漂々焉たる、恰かも海上の萍の如し、而して一度其主義を主張するや、口よ於てし、文よ於てし、又手に於てす、彼の如きは實よ人道の爲に献身したる者と云ふべし。

彼常よ叫て曰く、予の目的は自由人の集まれる無政府社會を作るにありと、而して人あり其手段方法を問や、曰く革命あるのみと。

マラテスタ氏は實に世界國家政府の敵なり、而して英國政府の此敵を其社會内よ容れて敢て關せざるが如き度量よ至ては予は更に感歎せざる可からざるなり。

五節　勞働倶樂部

十八世記以前よ在りては、英國の王皇貴族、獨り威福を恣まゝにして、勞働者を見ること牛馬の如く、此と交し此と談ずるさえ、以て不名譽となす有樣なりき、全國勞働者籍に感ずる所ありけん、全國の職人に宣告して曰く。

吾人は春夏秋冬の別なく、身を以て牛馬に擬し、勤勉すれども、擧ぐる所の利益は悉く雇主に吸收され、苦役日に日よ增して、收入の道絶えんとす、而して吾人がかく雇主よ虐待せらゝ所以のものは、實よ吾人の强固なる團結なきよ基因す、去れば、全國の勞働者諸君は、互に同盟協力して、以て彼等の我儘跋扈を制せざる可からすと。

此を聞き裡面より應じ來る勞働者引も切らず、終に茲に勞働倶樂部と云ふ名義の元に、一大團結を見るに至れり、今其組織の大畧を記述せば全

國の勞働者は地の遠近を論ぜず、此よ加入し、倫敦を以て中央本部となし、各地に支部を置き、互に氣脉を通じ、新入會者は會員の紹介に依りて進退を共にすることを誓ふ、勞働倶樂部の會費は、毎週五十錢位よして、此を倫敦本部に積立て置き、以て不時の用に供するものなり。

現今勞働倶樂部の會員は、數百万人にして、英國内の石炭工夫のみにても、實に七十万人なりと云ふ、去れば、彼等が納むる所の僅少なる會費も、塵も積れば山とやらよて、今に於ては、殆んど經濟界の一問題たる程の巨額に達し、其の基礎益々强固なるを見る。

然ば此積立金で何等の用に供するか、曰く會員中災厄よ罹るものあれば此を救うと、次にストライキの節に使用せんが爲なり。同盟罷工とは雇主が不當の取扱をなし、相應の給金をも支拂わざる時、職工等が就業を

罷め、雇主を困却せしむる非常手段にして、必ずしも無法亂暴をなすの意の爲めにあらざるあり、勞働者等は、ストライキせんとする前よ常りて、雇主職人間の爭論を仲裁する爲に、仲裁人を選び、互に曲直を陳述して成るべく平和の方法よて、談判を成就せんとするを常とす、去れども、仲裁もいよ〳〵不調となりし時は、一應事狀を倫敦の中央本部に計り、以てストライキをなすも、不可あきやを其開議に問へば、本部に於ては事の成行を各地の支部に照會し、其意見を集め、若し可とするもの多くんば、乃ち令を下して罷工を實行せしむ、本部に於て、罷工を許せば、勞働の中止中は本部より、貯蓄資金を給して、衣食の用に供し、若て後患なからしむ、罷工の職工等は、日々雇主の擧動を窺い、雇主が以し他の職工を雇入るゝ如きとあらば、行て此を遮り以て其契約を成立せ

しめざらしむ、又他の職工も、德義上決して、罷工職工の職業を奪ふが如き擧に出ず、飽くまで同盟團結して、雇主の悔悟を待つ有樣は、實に吾日本等に於て見ると能はざる美風と言ふべし。

六節　倫敦市の乞食

昔倫敦に多くの乞食あり、世の慈善家大に慈善金を募集して、乞食非人を救濟せんとて、此に金錢を分ち與へしが、其結果却て多くの乞食を出し倫敦の貧民は吾も吾もと乞食希望者となるに至れり、去ば人を救濟せんとするや、徒に金錢衣食を與へ以て足れりとす可からず、此れ却て乞食根性を貧民に與へ、其結果實に恐るべきものあるが故なり、當時英國政府令を發して曰く、『勞働せざる者は生存する可からず』と而してカーライ

ル此に答て曰く『勞働せんとするも職なきをいかん』と、然り予輩は勞働せざる者の社會に生存す可からざるを信ず、されども吾人は勞働すべき職なきを如何せん、先にウイリヤムブース氏は叫で曰く、人をして馬以上たらしめよ馬は職業あり、食物あり、又眠るべきの家あり、然るに神の子は、職業なく、食物なく、又眠るべきの家なきにあらずやと、言や痛切なりと云ふべし、噫吾人は目前馬以下の神の子を見るなり、此れ抑々誰の罪ぞや。

東倫敦は年々饑饉の絶間なし、倫敦の饑饉は、此を印度の饑饉に比ぶれば、全く其種類を異にす、印度の饑饉に於ては、實際其所に食すべき物なきなり、去ども倫敦の饑饉に於ては、食すべき食物は澤山なり、彼等貧民は、眼前に山なす麵包を見つゝ、胃を空にして餓へざる可からず

噫此所に喰ふべきの食物ありて、而して此所に餓死する人あり、此れ實に奇々怪々の至りあらずや、吾人は叫んとす、今日の文明は、千代萩の鶴千代君流の文明なりと、此れ抑々誰の罪ぞや。

倫敦の乞食は、日本の乞食と異なりて、只掌を出して、物を乞はず、歌を唱ひ、又はマッチ、洋服のボタン、靴の紐などを賣る等、兎に角に、唯にて物を乞ふ者を見るは稀なり、乞食は街道の人車道の中間に立ち、首に箱を懸け、其中に色々な一錢二錢の品本を陳列し、往來の人々に購買をすゝめる。

ゼントルメン、此は卽ち天下無双の安殖鋭である、二枚が一錢二枚が一錢、廉いもんだ、御買いなさい。

サアサア天下有望の事務家諸君、此は古今無類の輕便鉛筆である、銀

行員、新聞社員、又は學生諸君は、必ず御買下さい、四本が一錢、廉いもんだ。

私は盲で御座います、憫れと思召して、瑞典國直輸入のマツチを御買い下され。

と走るが如き倫敦の多忙なる市民に、購買を促しつゝあるは、彼の乞食の有樣なり。

七節　婦人勞働者

ヘンリー、ジヨージ氏が曰く。

予の室の下よは、數人の裁縫工女あり、終日其足を以て裁縫器を動かす予は亞細亞に於て、其頭上に水瓶を載せて運ぶ所の娘達を見たり、又

南米に於ては、重きを肩にする年少女子を見たり、其身体は强靭にして能く屈伸に堪へ、肢幹又能く其度に適するを見たりき、然れども年少の婦女子を以て、裁縫器の動力たらしむるは、是れ其健康を害し、其外貌を損ずる者とす、而して此等の裁縫工女は、後に至りて我共和國の、自由民を生まんとす、否生まざる可からず。

と婦人を勞働者とするとの可非は、古來學者政治家の議論ある所なれども、目前に餓死に頻する時に當りては、婦人たりとて又勞働者たらざる可からず、此れ理論にあらず實際問題なればなり、婦人勞働の弊害の種々ある中よも、最も重なる點は、小兒の保育を如何にせんと云にあり、抑婦女子の結婚して子を生ずるや、之を保育するは其任務の最大緊要部にして、此れ實に一身一家の爲ならず、社會全体の爲なればなり、若し

母たる人にして、其兒の保育を怠り、充分の成長を妨ぐるか、又は不充分なる裸母に一任し去る時は、次の時代、即ち其兒の時代に當り、世に心身の不完全なる者多くして、社會の進歩を害すること多大なるか故なり、而して婦人を職工とするは、自然右の弊害に陷いるを免れざるなり、予は今ウエールスに在りて婦人編物工場の有樣を記述して、以て議論の參考に供せんとす。

工場には八百人の既婚職工女あり、別に又小兒を置くべき一室を設く、小兒室に至れば、無數の搖籃を兩側に吊して、小蒸汽機械の力を假り、絶えず左右に動搖せしむるのしかけなり、蓋し小兒は、動かせば、靜まるものなれば、扨てそ右の趣向に出でしものにして、若干名の子守を雇ひ、其給金は母共に於て自ら拂ふものなり、以て此等多數の小兒を監護せし

め、彼方に泣く子あれば、直に往て乳を與へ、此方へ手足を露はす者あれば、又往て其寒を防ぎ、諸方に奔走して、注意怠らざるが故に、子守の員數少くして能く監護の任に堪へて、小兒は安全なるを得るのみか、母共にも亦職業の時間を定めて、其子を見舞はしむるが故に、心靜かに業を取りて又小兒の保育を氣遣ふに足らざるなり。

此れ現今に於る最良の方法と稱すべく、保育上に於ても先づ以て無難なりと云も可ならんか。

八節　貧民町の漫性飢饉

貧とは如何に思ひ過ぎなるよ、茲に天則の如き法律あるも、茲に完全なる教育法あるも、又完全なる衛生組合あるも、醫師あるも、食物店あ

るも衣服店あるも、吾等一度赤貧の淵に陷いる時は、學校あるも、其子を上らすると能はず、衛生組合あるも衛生に注意すると能はず、難病身よ迫るも名醫の門よ至る能ず、飢するも食物を得る能ず、凍するも衣服を購求すると能ざるなり、嗚呼貧の一字實に世界人類の敵たり。

世界中の最大倫敦市街よは、數千戸の肉屋あり、數万戸の麵包屋あり、其肉屋の店頭に鉤下せる多量の肉は、野蠻人を喫驚せしむるにも拘らず該府の死亡表には、飢餓に因れる死亡の常欄を有せり、去れと該死亡表よ掲げある餓死の人數は、決して其正鵠を得たるものにあらず、何となれば、實際飢餓に依り死したる者あるも、其病性の漫性なるが故に、醫師の他症を以て名命し、世人の以て餓死となさゞる、即ち餓死欄内に入らざる、漫性飢死者其死の最大多數を含めるが故なり。

多くの稚兒は、滋養と衣服の不充分より死亡するにあらずや、多くの老人は、貧を苦よして精神病たるにあらずや、縊死するよあらずや、家なくして野宿し、風邪となり肺病たるにあらずや、噫生存の必要品は山の如くに店頭に積めり、而して老人は此を得るの資なきの故を以て、餓死せざる可からず、中夏倫敦の裏店の稚兒は、蠅の如く死亡せり、若し此に一片の氷と、一封の藥を與ふれば、或は死せざるやも知る可からざるなり、ヘンリーヅョーシ氏が曰く。

桑港を一覽せよ、其街裏には自已の住宅の爲に百五十万の大金を費し其小兒にはクリストマスの贈物として二十万圓の合衆國公債証書を送り、其の妻をばパリー市に遊ばしめ其所に別莊として魯國大公の住宅を欺く斗りの高樓を構へ、贅澤の成んすべなくして、方法に苦しむ自

由民あり、而して該市には、又他の自由民あり、予が市街に行くに際して、僅かに五厘一錢を乞い求め、職業なく、妻もなく、家もなく、食物もなく、衣服もなき、痩せ衰へたる文明國の自由民あるを見るなり。

嗚呼人類大多數の狀態にして玆に改むべきなくんば、理性智識の徒らに增進し、生産富財增加し來りたるに係らず、貧民貧兒天下に滿る、不義奸策の人々競爭場裏の戰勝者となり、世界は見る見る闇黑界と變化やすらん予等はかくも不公平なる世界は、寧ろ彗星の天上より落下し來りて、ソドムとゴモラの如く、世界を蕩盡するこそ却て當然のことと思ふなり、世人曰ふ『十八世紀の人は、壓制せる主家貴族の奴隷的境遇を免れ、自主自宰の人となれり』と而して現今の文明は如何ん、『自主自宰頗る可なり、しかも、自主の人往々に餓死するにあらずや、參政の大權を有する人尙且衣食をだに得る能はざるにあらずや』と叫ばざる可からざる狀態あらずや。

九節　銘酒屋（バッカス・クロス）

酒は彼等の友なり、彼等は殆ど飲む爲に生存するが如し、土曜日の夜貧民町の銘酒店の外に至りて、其內部の有樣を覗き見よ、無數の無賴漢、下等の勞働者、頓狂娘、などが、立ち飲みをきめ込み居るを見るべし。酒の醉の全身に回るや、耳熱し興到り、彼等は千鳥足をもて舞踏を始む、破れ靴にて舞ふとなれば、其靴音も亦ゴツゴツ然たり、椅子に倚りし娘子軍の、舞踏の群に混ずるや、一層の騷動を極む、東西に起る、歡喜の聲、流行俗歌の吟聲、波音の如き笑聲。

かく盛に舞躍しつゝある所を、大喊唱の勇ましく、進み來るは、英國産の救世軍なり、醉漢等は門外に出で、救世軍を見かけて石を投げる、罵れる、一人の醉漢は、他の人の肩よ飛び乘り、醉眼朦朧として、酒氣粉々手を打ち振りつゝ演説をなせり。

酒と色とは、吾々の命よ、妻があるではなし、家があるではなし、名譽金錢があるではなし、毎日朝から晩まで血の汗で働いて、人世の何の樂かあるか、酒と色とが惡魔だとは、救世軍の奴等が言ふことが解らんわい。

飲め、飲め、胃の破裂するまで飲め、飲んで死だら極樂だ、彼等は牛の如く飲み、虎の如く笑へり、而して今や銘酒屋の門には、三四人の女は泥塗の如く醉ひ倒れ、其口よりぶつぶつと流れ出ずるは、涎か嘔吐か、サテも穢なし。

十節　愛蘭土慘膽の狀況

弱は強に敵せず、小は大に勝たず、愛蘭土の人民は年々英蘭の虐遇を受け、生前に苦しめられ、死後に辱しめられ、世々氏々怨を累ね、六合に洽き天日の光も、遂に愛蘭を照さずして、以て今日に至りしことなれば、ヲーコンネル氏等、ます〳〵精神を振い、其暴制に抵抗せしが、氏は遂に其志を果すと能ずして、千八百四十七年三月十五日、瑞西土のゼニバに於て失望傷心の餘、羈旅の枕の露と共に憫むべし不歸の人となれり、抑愛蘭土の土地は同國が、英國と聯合の際に、貴族其他の資本家に賣渡されしものなれば、買取りたる英國の貴族資本家は、其地の主人公にして、

彼等は大抵英國に住し、多少法律の心得ある殘酷無情の代理人を愛蘭土に派遣して、小作人を管轄せしめ、又他の方に於ては、英政府は騎虎の勢を以て、愛蘭士人民を抑壓し、其小作人を苦しむると、實に牛馬に對するよりも尙甚だしかりしなり。

土地豊なれば、即ち小作料を高め、年凶なれども假す所なく、少しく納稅を延滯すれば、直に領內を放逐し、爲に飢餓凍死する者あるも顧みず實に見るに堪ねざる慘狀を極めたり、斯る酷薄無情を以て幾歲月の間、領內の人民を抑へ付けたるとなれば、人民の性質も漸く詭激にして、毆打殺人を容易に行い、人々其堵に安ずると能はず、惡風天下に滿ち、靑天白日公然街頭にて人を殺し、夜隱に乘じて處女を姦し、詭激又詭激實に目も當てられぬ有樣なりき。

當時愛蘭よフエニアニズムと云へる一派あり、彼等は自國を獨立共和國となさんとする團結にして、中にオードノバン、ロッサ、なる過激論者あり、自ら文學政治協會なるものを組織し、猛烈なる運動を始め、抱腕切齒憤激の徒と共に、暴擧を企つるに至れり、然るに腐敗せる警察官は、彼等を捕縛して刑に處したりければ、一時優勢に見へし義軍も、亦再び見ると能ざるに至れり、既にしてアイザック、バッドなる者出で來りて愛蘭國民黨を起し、土地法案を提して英政府に抗し、前後廿八回法案を英國議院に呈出せしが、一も通過せしとなく、千八百七十五年の議會に於て、抑壓條例を否決せんと、百方精を竭して、議論せしが、遂に口舌の能はざるを察し、窮策を以て唯議決を延引せんと欲し、愛蘭議員ビッガー氏は、五時間の長演說をなして、英國會を困らせしとありき。

バット氏元來才器なきにはあらざりしも、彼は熱心度に過ぎて其資力足らず、終よ充分其効を見る能わざりき、去とも彼は高潔の士にして、專心民情を慨歎し、一點亦私心なかりしは實に稀有なる政治家と稱すべし、今の愛蘭自治黨はパーネル氏の力に依るが如く云と雖も、畢竟バット氏の遺勳なりと云はざるを得す、パーネル氏は千八百七十五年を以て始めて國會よ入りしが、元來訥辯にして世人彼を緘默議員と呼びし程なりき。然るに彼は次第〳〵に其才器を顯し、千八百七十七年英國議院にて保守黨のサースタンフォード、ノースコート氏と激論せし時の如きは、痛快なる雄辯を振ひ彼を論駁し、時の深更に及びたるをも忘れて激論せしが、其時傍聽人も漸く退散して、寂寞たる頃、婦人傍聽席に通夜唯一人の婦人あるのみなりしが、是れなんパーネル氏の妹にして阿兄の議論に寒を忘

れて心斗りの味方せしとは實に聞くも優さしき語よころ。

既にして千八百七十九年、天又もや愛蘭に禍して、五穀稔らず、物價非常に騰貴して、一大飢饉に迫りければ、地主等は益々貧民を苛責し、貧民の家を失い諸方に流轉する者日に益々多くして、目も當てられぬ有樣なりしかば、愛蘭黨は茲に協議を擬し、此の上は外國に依賴して、救濟の策を講せざる可からずと、議論一決し、軈てパーネル氏とヂロン氏は共に米大陸に赴き、到る處に演說をして英政府の無情を述べ、愛國民の不幸を訴へしに、遠よ自由民は爭て之を迎へ、遂よパーネル氏は華盛頓の國會にて演說をなし、七十二万圓の義捐金を得たり、パアネル氏の米國遊說を終りて愛蘭に歸り來るや、人望益々高く、遂に自治黨の首領たるに至れり。

同年宰相グラツトストン氏は、又もや愛蘭抑壓條令を國會に呈出せしかば、パアネル氏は、畢生の力を竭して此に反抗し、論爭四ヶ年よして終に氏は入牢の身となれり、後グラツトストン氏はパネアル氏と約し愛蘭の自治を許さんと欲し、議案を呈出せしが、ハーチントン侯は極力此に反對し遂に通過を見るに至らざりき。

第二章　地底の倫敦

一節　貧民窟の起源

佛國の大革命も終りを告げて、歐洲の文明は亦變化に變化を來し十九世紀の初めごろより。製造工業の隆盛は日の出の勢にて、彼所に會社、此所に工場と所謂勞働のトラストを見るに至りぬ、當時倫敦に於ても數多の工場テームス河の邊なる市の東端に起れり、田を耕せし農夫は鍬をすてゝ此所に來り、牛を引ける牧畜少年も又來つて此所に勞働に從事ず、時世斯の如くなるが故に、見る〳〵多くの勞働者此所に集まり、僅かに十年ならざるに、此邊一帶の田園を變じて、道路の長さ五百哩の一大市街となり、其人口五六十万人を有するに至れり。

彼等は男も女も老も幼も皆早朝より、工場、船渠、倉庫、商會に出勤して絶へず西倫敦なる資本家の爲めに汗血を絞る、而して夜七時頃に至れば、各々勞働の持ち場持ち場より、歸り來りて雀の巣の如き家庭に入りて、僅かに痩せたる妻の慰に依り不平の涙を呑み下げざる可からず。

貧民町の内にても、ストラット、フード、カストム、ハウエ、カンニングタウン、等は殊に一種の厭ふべき臭を有し、一軒の書籍店もなく、シルクハットの紳士を見ること甚だ稀なり、去れどもポプラーに至れば同じく貧民町なりと雖も、流石は西倫敦に通ずる大通だけありて、何やら都府らしき風あり。

貧民窟の家には毎軒四五の室ありて、一室毎に一家族の住する者多し、但し不潔なる家にても一ケ月三十圓より四十圓の屋賃なれば、貧民は此

の如き家を一族にて專有すること能ざるなり。

二節　貧民町の天使

世は無常、人は社會的競爭に追はれて、金錢なき者は坐して死せざる可からず、實に斯の如きの社會にありては百圓に勝つ者は獨り二百圓あるのみにころ。

今夜は何所に宿るとせふか、テームス河畔のロハ臺に野宿せんか、去りとは毎夜々々の野宿、吾身ながらも能く病氣とならんもの今日で丁度パン一片口に入れないのが二日ぶり、噫たまつたものではない。

と獨言云ひつゝ、ひよろり〳〵と、足波弱く杖にすがりつゝ當てもなく行く老女、目かち耳から首から鼻、口から頰にかけて皺なきと此上なし

寒風北極より吹て、テームスの河水も爲に凍るの寒き夜に當り、雪を踏て而してテームス河畔のロハ臺に至り見よ、誰が母やらん誰が父やらん。果た誰が子やらんか、寒風に吹きこなされて、全身氷の如く、僅かに虫の息の罷々たる人を見るべし、噫能ふべくんば世の人よ、此同胞に熱きスープ一碗を惠めよ。

恁かる所に七八人の男女寒風を踏で來るあり、此れ折々に何人ぞ、何の用ありて、此全社會眠りし五更の月を踏で此のロハ臺には來りしや、彼等は傳道師なり、篤志なる傳道師なり、神より選ばれし、愛の教の傳道師等は、寒夜炬燧よ入りて眠ると雖も、テームス河畔に多くの氷の如く冷たくなれる兄弟姉妹あるとを思ては、通夜眠ると能はず、双眼より同情の涙を落しつゝ來つて凍へたる貧民を慰め、且彼等に一碗宛の熱きス

ープを飲ましめんとはするなり。

オヽ可愛ういにヤア御老人、起きて熱いスープを呑みなさい。

老人は手を合して、此婦人傳道師を拜み。

アアアあなたは、テテテ天の使ではないか、ヲヲ寒い、寒い、死にうを だハハフフフ泣きます、涙が出ます。

傍に立てる先の傳道師は、不覺の涙をはら〳〵と流し。

アア世よは斯の如き神の子が滿つるなるに、去りとは世の宗教家の口にのみ福音を述べて、手に福音を示さぬことや、御老人御氣の毒なとで、此のスープ二三杯飲めば身体も温かになります。

老人は又も手を合して只々『フフフフ』と泣くのやら、笑ふのやら。見る見る三四杯の熱いゆけの立つスープを飲み乾して又も『フフフフ』泣くの

やら笑ふのやら。

此はテームス河畔に於ける寒夜の光景なり、去れど傳道師等が、貧民の爲に同情ある運動をなすとは、一に野外に於てのみならず、彼等は日毎夜毎に、多くの貧民の巣窟を見舞い、此所ゑパンなき者あれば、パンを與へ、彼所に病に臥する者あれば、藥を與へて此を看護し、依頼なき少女あれば此を救いて養育院に送り、悪霊なれば此を感化院に送る、噫彼等は實に生ける天の使にあらずして何ぞ。

予の倫敦に住せし時、予も又貧民の一人ありければ。一人の訪問傳道師は日に日に予を訪問し呉れたり、彼等は來て盜るゝ同情を以て予を慰め又予を彼所此所へ引ぱり廻りて、多くの人に交際をなさしめ、又予が去て日本ゑ歸らんとするや、會堂に集りて、離別の祈禱會を開き、交情實

ゑ倫敦にある日本人よりもこまやかなりき。

三節　貧民窟の教育

小學校、高等小學校の外に、各教會に傳道師牧師の教授する、夜學校ありて文學史學等を教へ、又多くの女學校もありて、勞働者の少しく生活に自由なる者の子女は此に通學す、其他五六の職業學校ありて、勞働者の子弟に、希望希望の職業を教ゆ、靴師たらんと欲する者は靴を作ると を學び、理髮師たるを欲する者は理髮を學ぶと云ふが如き風なり。

其他稍高等の文學又は史學、經濟學法律學、外國語を學んと欲する者ハカンニング、タウン邊に在る。ヨツクスフオード館に入る者多し、これはオツクスフオード大學出身者中の篤志家の自らこゝへ住居して、此が

教育に從事する者にして、其目的は宗教的の教育を勞働者に授け、彼等の精神を高め、知識を弘め、健康を奬め、幸福を增し、其の狀態を改良し併せて、自ら貧民問題を研究せんとするにあり、其館員は日中は己のが本職を務め夜は此所に歸り來て當館の事務に盡力するにあり、彼等は無報酬にて勞働者を教へ、食料、宿料、皆自辨にして、尙も餘裕あらば、此を當館に寄附して、費用を補助す、夏期は勞働者の勞働期なるが故に休業し、十月頃より、夜學校を開く、吾國の大學生中彼等の如き精神家なきか。

次はポプラーの海人教會にして、專ら世界各國より倫敦に入り來る外國の水夫水兵を感化する事業なり、其內部には飲食店あり、寄宿舍あり、書籍館あり、說教場あり、教場あり、言語不通の外國水兵も此所に來れ

ば默して万事を辨ずることを得べし、目下日本の傳道師一人あり、堀某と云ふ彼はケンブリッジ大學の生徒にして時に來て日本より來る水夫水兵に傳道しつゝあり。

貧民窟には女子倶樂部なるものあり、其役員は何れもオックス、フォード大學出身の女子連中にして、彼等は所謂世の虛名、物質的有形の幸福を犧牲となし、献身堅固に、憫れなる工女に同情して、彼等の狀態を改良せんとするにあり、其會員は皆女子にして、日中は男工と同じく塵にまみれて勞働に從事し、色も光澤もなき背白き女なれども、夜に至れば倶樂部に來て熱心なる女教師の教導を受け、聲の好き者は唱い、ピヤノの上手なる者は此を遊び、疲れたるものは身を伸ばして休み、一日の疲れも全く此所に忘るゝなり、吾國の女子中斯の如き献身の婦人幾人かある。

其他貧民町には多くの圖書館ありて、其日其日の新聞は勿論、其他多くの書籍ありて無料にて觀覽することを許す。

四節　無政府黨の出版物

無政府黨の連中と云へば、世人一概に之を退ぞけて交せず、然れども彼等が其主義を擴張せん爲に辛苦すると亦非常なるものにて、殆んど自己の生活を度外に置き、一意專心其成効ょ向て突進して已まず、若し玆に重大なる一問題の起るあらんか、衣服を典し、時計を賣り、財布の底を拂い、以て此が費用に當つ、其主義の爲に一點の私心なきと驚くの外なし。

彼等の一朝事破れて斷頭臺に登るや、亦實に殊勝なるものにて、斷らるゝとも口を噤んで一言を發せず、以て同志に約せし誓を死守す、或る無政府黨員の如きは死に至るも其本名を語らず、警吏も之を呼ぶに方法なく、鳥と云へる名を以て綽名となし、『鳥よ鳥よ』と呼びたりきと云ふ。

無政府黨の出版物は極々安價のもの多く、多くの貧民に讀ましむる目的なるか故に、一錢又は五厘のものも甚だ多し、今其書冊の名三四を示せば

Wace System	クロパトキン著
Commun of Paris	クロパトキン著
Talk About Anarchist	マラテスタ著
Anarchist Communism	クロパトキン著
Anarchy	マラテスタ著
Anarchist Morality	クロパトキン著

Anarchism And Autrace　　ウィルソン著
Chicago Anarchist　　バクニン著
God and The State

此等は予が記臆せる一部分なり

快男子バーマー君

予の東部倫敦の貧民窟、テニソン街の天井裏に住居するや、隣室に怪しき一青年あり、其名をバーマーと呼ぶ無宗教者にして道理信者なり、市人皆呼ぶに無頼漢の名を以てす、彼首に赤色のハンカチを捲き、拘子形のパイプを啣へ、流行の俗歌を鼻にて唄いつゝ、破れ垢づきし山高帽子を被り、毎朝八時に起き出でゝ、馬蹄鍛冶に通勤す、曰く食ふ爲に働くなり去れども喰へざるとあり、と夜七時頃歸り來りて、裏手の狹き庭園に出で、木製のへこたり椅子に大の字なりに横はり、大聲を發して近邊の貧民連を呼集む。

貧民多く集り來るや、ポケツトのブランデーを示し、先づ自から瓶に口つけて一呑し、次の人に渡す、次の先生も瓶に口つけて二三呑して、又次の人に渡す、次の先生も亦斯の如くす、一座一本のブランデーに醉ひ蕩然として耳熱するや、其議論殺風景である。

馬鹿げた事だ、オイ此頃〇〇は米國のヘツドをやつつけたろうだネ。

未だ新聞上では何とも見へぬせ。

新聞が當になるかい、……何でも七八日前に米國に到着した筈だ、……而し此は發言無用……默、默。

斯く言つゝありしが、今や一人は俗歌を唄い出した。

三千世界を於前と二人で
むやみに血の雨をふらせたい
はは〜〜〜〜唱へ、唱へ。

フランス革命のダントンでさるも。
斷頭臺上で一しづく。

アア妻子があつても一枚の冬衣も買てやるともならず、モー此樣なつては、自棄だ自棄だ。

パーマーは獨り沈默せしが、次の如く獨語した。

アゝ浮世が自由になるならば、車夫や馬丁を馬に乘せ、水呑百姓玉輿、乞食非人ゑ絹を着せ、世界平等の天國を今此前に見んものを、噫腐れたる哉、腐れたる哉、腐れついでに極點まで腐れてしまへ、俺れも腐れの手つだいせん、所有惡事を皆しとげて、惡魔の王と吾はならん諸君何をだアははゝゝゝ。

五節　貧民兒童の日本人を罵る通語

一日予貧民町中の貧民町なる、ストラツト、フードのマーグツト街を散歩す、蠅の如き貧兒は群り集りて口々に。

チンチン、チャイナ、マン、
チンチン、チャイナ、マン

と罵る、チャイナマンとは支那人のことなり、チンチンとは請請の意ならんか。

予即ち兒童に告て曰く。

予はチャイナマンよあらず、又チンチンにもあらず、予はジャパンニースなり、日本人なり、チャイナマンには長きピツグテールあり、吾等ジャパンニスにはかゝる、ものなし、君等予を呼ぶにチャイナマンを以てする勿れ。

予の此言を聞きつゝありし、一人の老女は、予を辯護して兒童に告けて曰く。

汝等の知が如く、ボキサー（義和團）の起りし、忌はしき國はチャイナなり、然れども此紳士の國はジャパンにして、即ち吾等の聯合軍と共に義和團征伐に從事せし、吾人の味方なり、去れば決して此紳士を粗末にすべからず。

兒童等此を聞て、爾來予を見ると只ユツコリと笑ふのみ。

六節　貧民に對する慈善事業

先に予の陳述せるが如く、貧民に有形物を分與するとは、却て多の害を與ふるものなり、去れば此に物を與ふるにも、次の如き箇條に注意せざる可からず。

貧窮者の貧となりし原因を研究して此に相應する救助を與ふる事。

救濟はなるべく貧窮に新近なる者になさしむる事。

貧窮者に自助の志を與ふる事。

能ふべくんば物質の施與を避くる事。

此等に注意して此が救濟に從事せざる可からず。

目下英國に在る公私慈善會は五千有餘にして其の慈善會の種類は次の如し。

貧困なる狂人。
貧困なる盲人。
貧困なる老衰者。
貧困なる僕婢の爲め。
貧困なる啞者の爲め。
貧困なる白痴の爲め。
貧困なる不治病者の爲め。
貧困なる普通病人の爲め（各病により其病院を異にす）
貧困なる小兒の爲め。

惡徒の爲め。
動物の爲め。

此等の如きものにして、其他慈善協會なるものあり、其目的は、慈善事業の學理を研究し、此が進歩と一致を計り、此の事業を擴張し。又慈善の方法を改良すると、時事的慈善問題を研究すると、あらゆる慈善會の實況を調査すると、及貧民中貧窮ならざる者の粧をして慈善會の補助をうけんとする者を處分すると等なりとす。

七節　貧民の友　救世軍

生れ更れ、新に生れずば。
御國に入るべからず、生れ更れ。

と唱ひつゝ無數の男女大鼓喇叭にて、三色の旗押立てつ、此所世に血の街と呼ばるゝ。ポプラーの裏町を進みつゝあり、多くの醉漢等は來て彼等を目がけて、石を投げビール瓶を投げるなど、有所迫害を試みたりしも身を棄てゝかゝりし、救世軍人は、一言も不平の聲を發するなく、先の軍歌を連け唱へり、救世軍とは抑々何物ぞや、吾人をして少しく是につき語らしめよ、今より三十五年前のとなりき、英國よ一人の熱心なる青年傳道師あり、彼は世の傳道會社の傳道法の、甚だ手ぬるきを憤慨し千八百六十五年東倫敦の貧民窟、マイル、エンド、ロードに於て、困窮人の爲よ日夜路傍演說をなす、彼の熱心に感じて來る者甚だ多く、終に一二の敎會を設けて、彼の說敎を聞くに至れり、此青年こそ卽ち今日の老大偉人、ブース氏となす。

救世軍は口に於て福音を傳ふるのみならず、一方には社會事業を營み多くの困窮人を現時的よ救濟することを勤む、社會事業部よは市中移民部あり農業移民部あり、口入屋あり、安宿あり、安料理屋あり、出獄人救濟所あり醜業婦救濟所あり、有ゆる有形的救濟事業に手を出し、以て世の救濟を內外より完ふせんとするは感心の外なし。

救世軍の組織は軍隊組織にして、世界萬國よ通して、大將一人あり中將一人あり、少將なるもの五六人あり、其他は大佐、中佐、少佐、大校、中校、少校、大尉、中尉、少尉、候補生にして、其數一万五千余人なり、今其現況を統計に示せば。

一、働きつゝある國々及殖民地	四十六ヶ國
二、傳道地	七千六百十六箇

三、傳道者　一万五千二百廿六人
四、週刊又は月刊書籍の數　五十九種
五、傳道に使用する國語　二十一種
六、新聞ときのこゑの賣れ高　百六万四千百十六部
七、社會事業部　六百九箇
八、社會事業部の働き人　二千二百七十四人
九、一ヶ年内の改心者　二十五万人
十、貧民町の授産事業其他　百十一箇

以上の統計に依れば、世界的一大事業と云ふべし、而して彼等は此等の事業の爲めに一ヶ年内に一千餘万圓の資本を運轉しつゝあり、噫正義の軍隊よ、常に正義たれ、國の異ると共に其正義の度を異にする勿れ、人

の異なると共に其正義の度を異にする勿れ、此は萬國を救ん爲めに生れし萬國の救世軍にあらぬか。

八節　虚無黨員との快談

昨年の夏なりけり、一新聞は報じて曰く。

去月七日倫敦のトツテンナンコート街にて、無政府黨員の大會合を催はされたり、此は大統領マツキンレー暗殺に關する、紐育の無政府黨員ケリーの報告を聞かんとて、集まりたるものにして、會合者中には伊多利の無政府黨員マラテスタも在り、會合者は何れも刺客ツオルゴスツを呼ぶに聖人の尊號を用い、マラテスタはツオルゴスツの行爲を(勇者の所爲)なりと稱したり、又ケリーは其報告に。マツキンレーの政

策は暗殺に値せざるも、此は勞働者に對する資本家の壓制の結果にして、大統領の暗殺に依りて、資本家に反省を與ふることを得ば、此暗殺は世を益すること大なりと述べたり。

次に倫敦エキスプレスの報に依れば。

テレサ、ブルクノイルと稱する女子は、米國大統領の暗殺を教唆したるものゝ一人なること、全く疑いなし、此女は伊多利人にして、美貌を有し、無政府黨員に對して頗る勢力あり、既往八ヶ年間倫敦に住するものなり、墺國皇后と伊國王の暗殺はマラテスタと此女の計劃したるものなり、米國のエンマ、ゴールドマン女史と異なり、テレサは演說をなすこと稀なれども、黨員に對する勢力は更に偉大なり、テレサは三ヶ月前米國より向て出發するに先立ち倫敦のソーホー街に於て演說

して曰く『無政府黨員と稱し虛無黨員と稱するも皆其目的は一よりして只世界の支配者を全滅するにあり、其○たり、○たり、○○○たるは問ふ所にあらず、諸君は遲緩なる方法に依りて、政府の改革を希む可からず、改革の遲きは頗る危險なることなり』と述べたるよし。

倫敦よりは尙多くの無政府黨員の隱窟あり、今予の知れる一友の實驗談を記さん。

予は紐育府の無政府黨員より、一葉の名刺を受けて、太西洋を渡りて倫敦に入りぬ、こは一は虛無黨の巨魁クロパトキンを見、又次には同じく虛無黨の名士ロッカーを見んとてなりき、名刺に記せる名宛の所に到りしが、此所は東倫敦のインデヤン、ドック邊なりき、四面慘憺たる貧民町より名刺と同じき番號の一戸を見出せしが、此は馬屋の二階に

して活版所あり、門に立ち戛々々と戸を打てば中より一人の男出で來り、頓狂の色をあらして。

『誰か』と問ふ

其風甚だ予の身分を怪しむに似たり、予は、『予は一東洋人なり、ロッカー氏を見んとす』と答へぬ。

彼益々不審の色をなし、鋭く答て曰く

『何人よりロッカーの事を聞きしか』と問ふ

『予は紐育の某より聞けり、其証據には此名刺あり』と、答て即ち其名刺を示す。

彼初めて安き色あり曰く吾ころは即ち其ロッカーなり、いざ入り給へと、闇黒なる隱窟にと予の手を引きぬ、此より快談時の移るを知らず

予は今彼とロッカー氏と如何なる談話をなせしやを知らざるなり。

九節　土地問題と貧民

嗟呼文明益々進んで、而して生活は益々困難ならんとす、即ち茲に社會黨の起り或は無政府黨の起り、又土地問題の起る所以なり、西報又々告て曰く。

露國發の報ゝ依れば、過般露國に於て同國高官の續々暗殺せられたるは、孰れも同國秘密團体の處爲なる由にして、其秘密團体は同國の各地に支部を有し、其團員の數は一万二千人ゝして、右ゆる階級の人士を含み、裕かなる資本を有し、團員は其目的を達する爲めに死を誓い居れり何ぞ其殺氣に滿つるや、然るに又もや報あり曰く

七日ボストン發の報に依れば、數日前大統領、ルーズベルトの同地に來れる前日より米國各所の無政府黨員同地に集合せり、彼等は新大統領の暗殺の陰謀を企てたる由にて。同地の警吏は非常なる警戒を加へ、華盛頓よりは巨多の平服巡査大統領に隨行せり、大統領の市街通過の時には三百人にて其身邊を護衛したり。

風雲は露國より轉じて米國に移り、至る所として、腥氣の滿ざるなし。

然るに又西報あり曰く

伊多利ミランよりの報に依れば、去月十八日同地に於てトネッチと云へる、一人の若き理髮師逮捕せられたり、右は伊國王が屢々同地を自動車にて通過せらるゝを暗殺せんと企てたる由にて、同人の家宅を搜索したるに氏の無政府黨員との往復したる巨多の文書を發見し、其中に

は明白に陰謀の事實を記しありたり。

又報あり。

一無政府黨員は、ピストルにて白耳義帝を射擊したり。

噫何ぞ、天地の腥氣に滿つるや、而して世の斯の如く波瀾多き所以の者は實に、社會上或所に不平等の所あるか故ならざるべからず、物は平なる時に音を發せず、社會に於ても然り、今日社會にピストルの音する所以は、社會上に不平等の所あるが故なり。

ヘンリー、ジョージ氏は此社會上の不平等を、平等ならしめんと欲して土地單一稅を提唱したり、彼は土地より、生ずる生產物に、其生產物の多少に應じて、稅金の多少を課し、以て利益の平等を得んとせり、此事實に可なりと雖も、氏の說の土地國有に類し、其結果、中央集權の恐わ

るを如何せん。

ヘンリー、ジョージの人物

東西兩半球幾百万の民人より救世者として、崇拜されたる、ヘンリー、ジョージ、は今より五六年前の冬紐育市の旅館に於て、腦卒中にて溘焉不歸の客となれり。

先生千八百三十九年九月二日を以て米國のヒラデルヒヤ市に生る、幼よりして頴悟、特に書見を好む、蓋し先生の父は書籍の出版を業としたればなり、十三歳にして、公立高等小學校を卒業し、優等證を得たり、十四歳の時遠洋航海船に水夫小僧として乘り込み、英國倫敦濠州のメルボルン、印度のカルカツタ等を回航し、十四ヶ月にして紐育に歸れり、先生の大膽剛毅なる此航海中數回瀕死の危難に遭逢せるにも

拘らず、又父の固く止むるを聽かずして、再び南米のボルン岬を經てヤリホルニヤ州に向て航海し船の、桑港に着くや諸先輩大に先生を諫めて航海業を思ひ止まらしめぬ、先生も亦窃かに感ずる所ありて、遂に同港に於て活版の職に就くことゝなれり、既にして毎週雜誌社に入りて、專ら文筆に從事し、二十才の時二三の同志と協力して、桑港毎夕新聞を發刊せり。

先生文筆の餘暇にて政治、經濟、哲學等の諸大家の著者を渉獵し、殊に經濟に於てスチユワート、ミル氏を賞贊したり、先生支那人の移住問題につき、千八百六十九年「トリビユン」紙上に其特論を掲げしが、スチユワルドミル氏一書を送りて大に該論を贊成したり。

是れより先き、經濟學上の大問題なる、資本と貨銀の關係につき、先

生はミル氏を賞述せり、先生紐育市に來りて、貧富の懸隔の漸く大な
らんとするの趨勢を目擊し、深く心に感動し、所爲らく、實業益々進
歩して貧困愈々增長す、二者の間必ず隱微なる理由なかる可からず、
即ち其理を發見せんが爲めよ、古今の大著述を講究すると雖も、毫も
其要領を得ず、殊にマルサス派の學說に至りては、益々先生を疑問に陷
らしむるのみ、此は於てか先生は、其隱微なる理由を自已の頭腦中に
探求すべく決しぬ。

先生是れより靜思、默座、屢々寢食を忘る、一日馬よ乘て郊外に散策
し、途に牧者に逢ふ、時に一點の光明は先生の腦裏に閃めけり、先生
曰く『余は其時偶然にも牧者よ對して、此邊の地價を問へり、其問
答の結果、恰かも天啓的知覺は予の胸中に浮出せり、即ち人口の增加

と共に、地價の騰貴し地價騰貴に比例して、借地料騰貴す、而かも地
價の騰貴は地主其人の勤勞に依るにあらず、社會進歩の結果なり、社
會進歩の結果は、即ち社會の共有物たらしむべく、決して個人に此を
私有せしむ可からず、而して個人に此を私有せしめず、社會の共有物
たらしむる方法は、一國の政費を悉く、土地に負擔せしむるにありと
の知覺即ち是なり』、先生の單一稅主義は實よ此時よ胚胎するものなり
先生か『土地及土地政策』を著述して單稅主義を發表したるは千八百七
十一年吾國の明治四年のことなりき。

先生は爾來仔々汲々として、單稅主義の調査研究に從事し千八百七十
九年八月迄に、彼の有名なる『進歩と貧困』の著述を完成し、同八十一年
此を公刊して、此に經濟學の組織を一新したり。

氏は其後此の主義を天に呼吸し、其死する當夜の如きも何數万の人の前にて路傍演説をなしつゝありき、然るに腦卒中にて空しく不歸の客となれり。

以上記せる土地單一税に反して、英國にワーレー派なるものありて、此は土地より生ずる利益を平分するのみにて滿足せず、土地其物を平分せんとするよあり、ランド、ナショナリゼーション、ソサイエチーとは即ち此れなり、其主義とする所は、人類の土地平等享有權を回復して、各個人の獨立の基礎を確實するよありて、其原則は、人工によりてなれるものは、其勞力者之れを有し、天然力よ依りて成れるものなれば、凡て人類平等に享有す可しと云ふよあり、若し彼等の取る所の方法に依れば、中央集權の恐なく、完全なる社會を組織するとを得べし。

今日吾國に矢野氏の一派、新社會を云々せらるゝと雖も、其所思果してワーレー氏の上に出するを得るや否、吾人は區々たる帝國主義土地問題あらばいざ知らず、此を世界的になさんとするには、個人的に此組織を成就せざる可からざるとを信ずるものなり。

十節　貧民窟の犯罪人

俺等だつて、悪いことはしたくないさ、而しだ、冬よなつても着る衣物もなく、寒天に單衣一枚でさ、朝から晩まで、一片のパンも口に入らずさ仕方がないから盗んで食んだ、牢に入れられても死ないい方が好いからな背に腹は代へられぬからな。

はは、、、、又此牢屋を吾家の樣よして居る老翁(ちい)めが、不平をこねだ

したぞ。

ほんとに左樣よ、俺は少年の時から四十度位、犯罪して、十余年間位牢屋に住で居たのだ、何も俺ばかりが惡いではない、俺の樣な人間を出す社會が惡るいのだ。

斯く語りつゝある、一人の老翁は英國貧民窟名代の惡漢にて、丁度四日前牢屋より出されたものなるか、五六日も經過せざるに又もや盜みをなして、牢屋に入れられた、彼等の中よは朝牢屋より出で、日中に犯罪し、其夜は又も牢屋に歸り來る者さへあり、而して皆曰く『一度牢屋に入れば社會の人々吾等を信せず、此を雇い呉るゝ者もなく、知人も見放ち歸る に家なく、立寄るべき友人もなく、即ち盜むで、一時を凌ぐよ至るなり』と 言の何ぞ可憫よして、淡白なるや予も亦死するよりも盜人となつて生き

ん方の贊成者なり、何とおれば吾人は生存して天地を樂まん爲に生れ來りし者にして、餓死せんか爲に生れ來らざりしが故なり、支那の伯夷叔齊の如き愚は吾等爲し能ざる方の性質なり。

第三章　素見物

一節　赤毛布

横濱を解纜して六十日の長き船路を終り、茲は早くも夢ゑ見し英國のテームス河畔なり、東西南北一切不案内の田舎者、何所に停車場のあることやら、何所に安宿の有ることやら、全く闇夜の盲も同然、予は呆然として頭をかくのみ。

此所に一人の女傳導師あり、其名をミスマクリンと云ひ、先に日本ゑ在ること九年、甚だ日本贔負なり、予は先づ此婦人を訪問して、倫敦市の概狀を聞くことなせり。

船を出て孃の寓居に至り門鐘を叩けば、マクリン孃眠ひろふに目を推へつゝ出で來れり、覺束なき日本語もて。

貴君は誰です。

ハイ私は日本から初めて英國に來た、タノと申す者です、實は此度遂に日本から此地ゑ參りましたが、一切方角も解りませず、實に困つて居ります。

左樣ですか、マア御這入りなさい……而し今は非常に早い、朝の七時です、私の下女はまだ眠て居ります、今は茶も菓子もない、……殘念ですが、失敬します、……貴君は始めて英國に來ましたから、まだ英國の風俗を知りません、英國では朝は人を訪問せない、貴君の國と全く反對です、朝早く入を訪問しますとは此國では失禮です。

サテサテ、右の次第ですか、申さるゝ如く私は、殆めて英國に參りま

したので、一切不案内で御座りますよ、故に私のなす多くの失禮は國の風と大目に見て、容赦して下さい。

左樣私は日本の事狀を知て居りますから、何とも思いません、而し此等のことを貴君に申すのは、一には後學の爲です、吾英國では、社會の習慣が、法律よりも嚴重よ守られて居ります、此社會上に成り立つ處の相互の約束は、英國の柱石であります、法律ありと雖も良心の制裁と、制裁よりなれる處の習慣なくば、其國の人には秩序なく、實に忌まはしき社會現象を見るに至ります……英國では、人を訪問する時か定まつて居ります、此はテーダイムと云い、午后の四時から六時頃まで、此時に來客に接すると云のが風習であります、若し然らずして時の定りもなく、何時でも出しぬさよ訪問されては、一よは規律が立

たず二には時間の不經濟此上もなく、三には相互に迷惑するとか澤山にあります。

ハハ全く理解りました、何と英國とは實に昔から不文律の發達した國だと承りましたが、成る程、現今に至る迄人民か相互よ約束を嚴守する氣風、實に見上げたものだ、成る程、成る程。

嬢は又予の手よせる松葉なりのメリケン帽子を見流しつ。

其帽子は英國にては流行しません、此は下等勞働者の工場内よて被るハイ而し此は亞米利加スタイルの新流行で。

ヲホホホ日本の新流行は巴理邊の百年前でせふよ。

次に嬢の視線は予の腰なる兵子帶に止まりぬ。

其腰にグル〳〵と捲れるは何ですか。

ハイ此は帶です、私はヅボンつりを肩よ懸るとこしまりが無くて歩行するとが出來ませんから、此樣に兵子帶をシツカリと捲て、腹に勇氣をつけ、倫敦を見ても喫驚せぬ樣に用意して居ります。

貴君其は日本の風俗です、英國では、其樣な風をするとは大失禮です、貴夫人の前よは一寸も其樣な風をして出るとは出來ません。

心切なるマクリン孃は腹臓なく予を敎訓しぬ、予は成るべく孃の言に依り身邊を裝飾し、自分では充分にハイカラになりし心にて、意氣揚々としてロンドン府に乘り込みぬ。

二節　便所問題

英國にては便所の二ツに別れあるなり、其は男子部と女子部にして、便所の前にはゼントルマンと云へる文字を記せる札とレディと云へる文字を記せる札の掲げあれば文字ある者は一目して瞭然たるを得べし。

昨年の夏なりけり、三笠艦を受取らんとて廻航員二三百人日本より英國よ來りけるが、三百人の兵士の二百九十九迄でエビシを辨ぜざる無文の人のみなりしかば、茲に珍奇妙々なる便所問題を演ずるものゝありしも無理ならぬとと云ふべし、彼等はゼントルマンもレディも讀み得ざるなり故よ尿臭ある所は以て放尿すべしと云へる犬の如き筆法よて、到る所の停車場内の便所を荒しまはりぬ。

或日三人の水兵は今しも婦人部の便所に誤り入りて、ボタンをはづしろ身になつて盛んに放尿しつゝありしが、ダイヤモンドよて首邊を裝れ

る貴族の令夫人は上等室より出で來りて何氣なく婦人便所に入り來りしが、彼女は驚くまいとか見なれぬ亞細亞人がしかも三人今や盛んに放尿しつゝある處なりしかば、キャーと叫んで走り出でぬ、令夫人は直に驛長を呼びて其不都合を詰りしかば、驛長は直に兵士を指揮せる海軍中尉に其不取締を詰問しぬ、去れども文字を異にする異國人の事なれば無禮するのも御互同志と茲に何等の破綻もなく笑て分るゝことを得たりと云ふ。

次ぎ起れる便所問題は二人の兵士が水晶宮の別室に放尿したる一事件にぞある、一日三百人の兵士は一人の中尉に案内され世界に名高き水晶宮を見物せんと出かけ行きぬ、中途にして二人の兵士盛んに放尿を催し來りて尿管將に破裂せんとす、即ち恭しく上官に問て曰く

上官小便に行きたい時は如何んと

然り倫敦には二錢出せば何所にても便所がある。

と答へたり、彼等二人は上官の言を信じ群の水晶宮ぎ到るや、先づ彼方此方へと放尿すべき所を探求しぬ、然るに此所に水晶宮の一隅に小なる一家屋ありて、其門前ぎ二錢と記したる札を掲ぐ、彼等思らく、是れなり、是れなりと大に喜で二錢を門番に投じ室内に入れば、室内一面に黄金を以て裝り、美麗言ふべかず、甲なる兵士乙を回視して曰く『何と美い便所なるかなと』互ぎ心ちよげぎ放尿しつゝありしが。

先の門番放尿の音の潛々然たるを聞き、蹴起して飛び込み來り茲ぎ一大悶着を見んとせしが多分の金錢を出して僅に諾ることを得しとは實ぎありそうな小便問題なり。

三節　英國帝人民に下る

却説英皇帝エドワードは其戴冠式の祝として倫敦の貧民五十万人に晩餐を賜はりたり、而して其際費されたる食料は牛肉三十五万斤羊肉十三万斤犢肉七万斤ハム五万斤四斤の麭包七万五千個蒔苣一万五千杷胡瓜四万三千本トマトー二万五千斤馬令薯四十万斤、チーズ六万二千五百斤、ビール三万六千ガルロン、ジンジャー、ビーヤ十万パインド、にして其食卓及腰掛を設くる爲めよ要したる板の長さは二百五十哩なりきと傳ふ。

むべなるかな、英國人民のビリトリヤ女王を呼で『吾母』と云ひ、エドワード王を『吾兄』と云ふとや、英國人民の王を愛するや實よ帝の如くせずして兄の如くするなり、茲に肉身の如き情交あり其の一致團結の強固なる其基因知るべきなり。

今日しも聖波兒大寺院の邊は何事やあらん道行く人の足早波く、或は路頭に立て物待ち顔の人もありけり、予は一人の立ちん仿に向ひ、『何ぞ』と問へば皇帝の通行なりと答ふ、平民に生れて平民にて死する吾々には路頭にてこそ皇帝の顔を見所なれ、去ば予も立ちん仿の群内に入り、皇帝の通行を見物することなせり。

待つ間程なく廿餘騎の近衛兵馬上勇ましく鐵蹄の音憂々として過ぎ行きぬ、續て來れるは英國風の熊皮帽を穿てる虎をもひしがん强壯なる二人の國旗の守護兵にして、第三番目言はずとしれたジョンブル然たる英國新皇帝なり、帝は左右の窓より覗く多くの市民を見て莞爾と笑い、頭なる三角帽を手に取られ頭を垂れて禮をなしつゝ進み行かる、窓より覗きし市民等も帝の溢るゝ愛の笑に接しては茲に一言あき能はず、即ち一同

脱帽して『帝よ健在なれ』と抄挨す彼方此方の屋根墓には無數の勞働者へローハローと叫び、兒童は王車よ尾して其安否を問ふ、國異なれば風も異なる、此を繁文褥禮の君子國風に比して何れが是か、何れが非か。

四節　議會の有樣

髪は長く垂れて肩に懸り、躰軀短小、眼光は金星の如く輝き、其容貌は沈痛にして精氣人に迫らんとして凄く、右の手に三尺大の劍を提し、左手一卷の聖經を繙く、偉風堂々百載の下仰げども猶ほ高し、此れ抑誰人の肖像ぞや、他あし英合衆國の議院前に屹立する、ヲリバア、クロムるエルの銅像なり。

倫敦の中心ナエーリン、クロスの西南よ當り、ウエストミンスター橋畔に

位してテームス河の流に沈む大厦あり尖閣高く雲漠を排して市中何處よりも望み得べし、此れなん英國の議院にして、上下兩院を始め高等法院も亦其中よあり、西の方向い合せて、ウエストミンスター寺院あり、其前は一面高濶たる一大庭園にして、中よピット、ビーコンスフヰルド、バーマーストン等の功臣各相の肖像肩を並べて屹立し威德の垂るゝ所百載の下吾人をして感慨已む能はざらしむ。

議會開會よ先ち議長はウエストミンスター寺院に至りて茲に神前よ宣誓式を畢りて、始めて議席よ就く、議員の數は總數六百七十名にして政府方は議長の右側に席を占め、反對黨は其左側に列し而して內閣員は常よ其右側の前席にあり。

英國議會は幾百千年の經驗を閲して漸く今日に至りしものなれば議場の

議論も自ら秩序ありて濫りゝ粗暴に亘らず、卓を打て滿腔の積鬱を吐露する田中正造流の慷慨演說は甚だ稀なり、若し又一朝議場に叱咤の聲起らんか是れ實に英國に於ける最大事件の起りし時ゝして、クロムエル、出でコブデン出で、ブライト出でパーネル出づる歷史的危急の時代たればなり。

上院は皇族、貴族、蘇國代議貴族、愛國代議貴族、大僧正、僧正を合せて四百九十名なり、抑も上院の議事と云へば下院の議事を復審するまでにして之を要するに上院は下院の議事を修正するのみと云ふて可ならん、去ば上院の裁判權は此院の最大切なる務にして上告裁判所としては高等裁判所及控訴裁判所の判決を復審し、始審裁判所ゝしては下院の彈劾を受理して國家ゝ對する重大の犯罪を審理し、又貴族の叛逆又は重罪を犯せ

る者を裁判し皇帝の命ゝ依り貴族世襲の爭を判決し皇帝の叙任せる新貴族の上院に入るを得るや否やを裁決するものなり。

予は今英國の大才子世界の難物たる、ジョセフ、チャンバーレンの傳を記し以て少しく英國の議員氣質の一端を傳んとす。

五節　ジョセフ、チャンバーレン氏

ジョセフ、チャンバーレン氏はビクトリヤ女王治世の發端ゝ當りて英國の片田舍に生る、彼の父は其日暮しの貧乏なる靴屋にして、其一家族の貧乏さ實に乞食の如くなりき、加之彼の兄弟は九人にして且つ皆幼少なりしが故ゝ父の苦心云ん方なく、朝より夕に至るまで十二時間の激しき勞働も兒群の爲めに空しくされ、實に目も當てられぬ有樣なりき、チャ

ンバーレン氏なる當時の大英國殖民大臣は實に此賤か荒れ屋の六番めの兒なりき。

彼の父はかくも貧乏ながらも見る處ありてジョセフを高等小學校ょ入學せしめぬ、去ればジョセフも父上の心を無にせまじと、他の富家の兒童ょりも百層の勉强をなし、又彼の記臆力は他の兒童よりも抜群なりしが故に常に全級の第一位を占め、校長は早くも彼の人物を重しと見たり。

彼は十三歳にして高等小學校を終り、其年轉じて倫敦大學校に入り、苦學すること三ヶ年ょして十六歳の時優等を以て卒業したり、學校を卒業なし今後の方針につき獨り苦慮しつゝありける一夜、田舍なる父より一本の書信來りぬ、封を破りて讀み流せば、「家事多忙なれば歸家して靴店の帳面づけをせよ」とのことなり、次の日彼は行李を整へ家に歸り喜で父の

命ょ服して靴店の帳場に座して餘念なし。

青年時代

學校卒業二ヶ年間は、靴屋の番頭として有耶無耶に暮したり、當時彼の父は其子等の助に依り店も除々に榮へ、且は此地方に信用ある正直者なりしかば、カードウイナス、ヒル、と云ふ所の靴屋連中の組頭に推選されぬ此時ジョセフ父を代表して組合に出で初めて衆人の前に立ち演說なるものを試みたり。

彼は其頃より、思想の源泉たる大主義を有しぬ、其は過激なる共和主義にして口を、極めて佛國革命の偉人を賞贊し、ブライト的尊王主義を諷論したり、彼は同年輩の青年と共和倶樂部と云へる團隊を創設し盛んに共和

論を主張せしかば、其事早くも全國の共和論者の知る所となり、千八百七十二年十一月倫敦ジャメス、ヒルにて開かれたる選擧改良會に於て彼は共和倶樂部を代表して一場の演說をなすこととなれり。

當時ヘンリート、ジョージ氏土地單一稅主義の演說をなさんとして米國よりリバープールよ來られしが、適らずチャンバーレン氏と會して議論を上下し意氣相投合して玆に彼は熱心なる土地問題家となれり、千八百八十五年チャンバーレン氏『富と貧』と云へる演題にて述て曰く『人の世界に生れ來るや、皆天權を有す、各人は皆此天與の共有物に對して分配を受くるの天權を有するなり、然るよ現今の社會は此天權を蹂躙して人を餓死に至らしむ』と、彼が熱心なる共和論者なるとは次に記せる彼の言行よ依り更に明白なり、數年前彼上院に立て英國の貴族を痛罵して曰く『貴族よ爾等はポテトの如し肥量多き土地にあらずんば發育せざる、不經濟の動物なり』と又世人の貴族を尊重するの過度なるを笑て曰く『世に帝王神權說なるものあり、是れ全く吾人を恐嚇せんとする好方法たり、去れども貴族神權說に至ては予は抱腹して噴飯せん』と彼が後年立身の道に進みバッキングハム王宮內に入るや、居を附近の勞働者の割長家の內よ搆へ夜學校を開き自ら此よ敎へしが如き、實に其所思を實行して殘すなしと云ふべし。

勞働時代

彼は十八歲にして父の靴店を去り、ベアミンガム市の一螺旋製造所の職人となりぬ、然り彼は絕世の才器を隱さて勞働に服したり、去れども彼は

天性の愛嬌者なり、殊に倫敦大學の卒業証書を有する身分なるが故に、世人皆彼を見ると只ならず、終に日曜學校の教師に選ばれ、後又ブロード街の夜學校に歴史學を講ずることとなれり。

當時の日曜學校生徒にして今は一家の主人なるジョセフの學生は談じて曰く『彼は吾等に聖書を講じぬ去ど彼は神のことを説かずして主人に義務を盡せと教へたり』、と又曰く『一日生徒に解し難き六ヶ敷問題を示し問て曰く諸君能く答へ得るやと、學生皆默して傾頭沈思じて一人として又答ふるなし、チャンバシレーン氏此を見て大聲に叱して曰く『十字街に立ち思案に迷ふ人は天下の大愚人なり、善にもあれ惡にもあれ其の一を選べよと言や暴なり去れど其意氣や愛すべし、彼は學校教員としては甚亂暴の方なりき、或る日の如きは帽子外套の儘にて教場よ入り來り、蝙蝠傘にて黑板を指し生徒を教へたりと云ふ。

政治家としての彼れ

彼が初めて社會に知られたる時は、實に彼の三十七歳なりし時、市會議員としてバアミンガム市會に入りたる時なり、當時彼は世人より見らるゝと重からず、選擧前に於ては世の人皆彼の候補者として打て出つるの大膽を笑へり、然るに選擧の結果は上の上にて、彼は最大多數にて議員の椅子を得たりき、彼がバアミンガムの市會議事堂に在るや輕調なること、小學校教員たりし時と同じく、長き茶褐色の外套を着し、赤襟を結び、半眼鏡をかけ、一見して恰も愚人の如し、議員等互よ問て曰く彼の愚人は誰ぞや然り彼は新議員チャンバーレン氏なりと、彼は遂にバアミンガムの市

長となり、教育制度を改革し人望益々高く、後選ばれてバアミンガム十万の勞働者を代表して英國議會に入るに至れり。

議會開會の當時滿堂の議員等の視線は田舍じみたる、赤ネキタイのチャンバーレンに注ぎぬ、彼は何とや思ひけん、院内の規則を蹂躙して帽子を穿てるまゝ院内に入り來り大手を振て彼方此方を歩行しぬ、守衛官は靜かにチャンバーレン氏に脱帽を促せしが、彼は『ソヲカ』と一睨して尚平然たり。

全議員は皆彼の聲を待てり、一週間を經ても、彼語らず、二週間を經ても尚を語らず、全議員殆んど待ちあぐみたる千八百七十六年八月四日教育法案の議題に登るや、待ちに待ちたる半眼鏡は針の如き鋭き論鋒にてツト立ちたり、……彼の聲の一度起るや全院の人々皆耳を聳てたり、

老政治家グラツドストン氏は憑れる椅子より前方に体を傾け、耳に手をかざし、注意深く彼の論旨を聞けり、當時彼とチャルスジルク氏とは院内有望の二青年政治家なりき。

彼は議會に在ること四ヶ年にしてグラッドストン氏の第二次内閣の時、推されて内閣に入り、グラツドストン氏を助けて當時の難問題を解決し終に今日の位置を得るに至れり、噫身を貧賤なる靴屋より起し、而して今や天下の重望を負ふ彼の如きは實に絶世の天才と云ふべし。

六節　倫敦の支那會

倫敦に二個の支那會あり、一は支那の政治問題及其他學術上の事等を研究する主旨に依りてなれるものにして、他は支那哥老會與中會等と氣脈

を道じ、一朝風雲の乘ずべきあらば、新獨立國を作らんとの不穩の大望を有する秘密團体なり、此團体はフランク、マソンと畧同性質のものにして個人主義を重んじ、人道の大義に依り世界の弱者を助けんとするものにして、會員の一人なるモルケン君は數年前日本に來りしとあり、其節予と交際ありしかば予の倫敦に至るや彼は來て予の寓を訪ひぬ。

イヤ君はモルケン君ならぬか、

久しぶりです。一昨年貴國に遊びし時は御厚意千万、貴國は實に美人を以て充滿せる樂天國だ、東京の烏森で豪遊した時は愉快であつた、予は丁度半年前より亞細亞に再度の旅行をおし、支那印度南洋諸嶋を巡遊し日本嶋にも立寄る筈なりしが、用事ありて此を果さず一週間前に倫敦に歸りしなり。

何です支那の革命は

默目〳〵〳〵氣慨のない支那人、意氣の銷沈したる支那人、動物的の支那人、哥老會も興中會も、保皇會も皆默目〳〵〳〵

然らば君は支那問題に於ては絶望なるか。

然り主人公の動かざる以上は先づ沈默せんなり。

予告て曰く支那革命黨何ぞ其多きや、曰く哥老會あり、曰く白蓮會なり、天地會なり大刀會なり小刀會なり、獨立會なり、双刀會なり、三合會なり興中會なり自立會なり保皇會なり、而して其會員を問へば曰く三十万人曰く四十万人と此多くの會ありて、而して此多くの會員あり、四百餘洲大なりと雖も、何ぞ革命の爲らざるなけんや、而して其爲らざる所以は如何ん、他なし彼等に實行の勇氣なきが故なり、昔大平王洪秀全の兵を

廣西の桂平に起すや同勢倍々一万に滿たず、而して其軍用金としては僅に五万圓を有せしと言にあらずや、しかも一度足を上げて北平を蹴るや、天下の子弟來つて此に應じ四百餘洲の四分の三を併呑し帝王と號すること前後十五年たりしにあらずや、事の成敗は其意氣にあり、今日の支那革命黨徒に其名を大にして意氣尙足らず、事の成らざる亦當然のことなりと。

七節　英國の大學校

一　英倫の大學

ヲツクスホード大學、ケンブリツジ大學及び倫敦の西ケンシントに在る倫敦大學は英倫に於ける大なるものにして、其他ダルハム大學あり、ニウカツスル市に專門學校としては、醫學校あり、理科學校あり、マンチエスター市にビクトリヤ大學あり、リバープール市にリバープール專門大學ありマンチエスター市にマンチエスター大學あり。

二　ウエルス大學

ウエルスに在る重なる大學校は、ウエルス大學、北ウエルス專門大學あり、南ウエルス大學にして、專門學校として有名なるは、聖ダビツト專門學校とす。

三　スコツトランドの大學

スコツトランドには、聖アンドロ大學校あり、千四百十一年の創立にかゝり、十万八千圓の建築費を消費したりと云ふ、目下此大學には學生三百七十八人あり、次はアバーデン大學校にして、千四百九十四年の創立にかゝり、目下學生八百人あり、而して此に教ゆる教授の數は二十三人なり

エヂンバラー大學校は英國三大學の一として、千五百八十二年の創立にかゝり其の建築費廿五万八千七百圓にして、目下の學生の數二千八百十一人あり、教授の數は四十一人にして教授中にて最も俸給の多きはアレキサンダークランボーン氏として、一ヶ年一万八千二百八十圓ありと云ふ。

四　愛蘭大學校

ダブリン大學校は愛蘭中の最大なるものにして、首府ダブリンに在り、教授四十五人ありて、愛蘭嶋學術研究の中心たり、次は官立愛蘭大學にして此れ亦ダブリン大學に讓らざる大なる學校なり、其他英國には多數の專門學校ありと雖も紙に限りあれば陳述せざるべし。

英國の大學なりとて、家屋の構造吾帝國大學と異れるにあらずと雖も、吾人をして甚だ高尚に思しむる所以のものは實に、其歴史的なるにあり請ふ英國に遊ばんとする人は先づケンブリッジ大學に至りて見物せよ、心切なる案内者は吾人に多くの教訓を與ふべし、寄宿舍に至らば其所に昔大宗教家ウエスレーが宗教を研究せし一室を見ることを得べく、又ピット等が經國の策に餘念なかりし讀書室に至ることを得べし、嗚呼此家屋此草木此山川何ぞ其れ偉大なるや、吾人は吾帝國大學が一日も早く此の如く偉大ならんことを希望して已まざるなり。

八節　家庭の天國

一定の時間を勞働に暮らし繁雜萬事を抛ちつゝ晩餐の食卓に家族團欒し

て四方山話に打興じ和氣陽々の間に食事を終はるは實に英國人民の無上の快樂とする所にして、此を喜ばざる者は不粋の野人となし社會より擯斥せらるゝものゝ如し、食事畢れば思い〳〵の遊びをなし、ピヤノの聲清ふして母は娘の藝に感じ唱歌の曲巧みにして父は子に和して舞ふ、親子打寛ぎて歡樂限りなき有樣は誠ま天國の如くにして、此を賤妓の遊藝に比して、或は家庭の不和合より出て他に嬌聲を事とする日本の紳士に比して、何れが上何れが下ぞ。

高尚優美なる音樂は人心を調和する効能ありて發しては社會の風俗を高尚にし、一國の氣風を高潔ならしむ、歐洲人の高尚なる音樂を好む亦故ありと云ふべし、此ま反して吾日本の樂器を見よ、三味線にしろ太鼓にしろ實に嬌亂醉舞の音の如く整然たる調和なく、此を聞く日本人の家庭

も亦三味線の音の如くチン〳〵然たるにあらずや、上は大臣より下は兵器局の職工に至るまで、皆此チンチン者流ならんとは愛ても尚餘りあるとと言ふべし。

家を以て歡樂の中心とすれば、隣保相集りて興を共にする等の事屢々にして、此事若し日本の如く手重なれば此に要する費用も多からんが、英國まては然らず、通常晩餐の頃を期して隣保の會を催し、來會の人々も口腹の爲ならざれば、頗る淡泊輕易にして招待されたる近隣の娘等は隔意なく座客と談話して、奏樂を懇望せらるれば隨て之を彈唱し氣輕ま立ち働きて憶するともなく、莊重に氣取ることもなく種々樣々の遊戯をなして興味淺からず又費用も多からず、英人の逸を取ると此の如くなれば、夫も樂を戸外に求めず、妻は能く家制を整へ、人和し家榮へて、國に

目出度現象を呈す、若し然らずして、妻のみ家に在りて家制を偷にするとも夫にして外に出で樂を戸外に求め多額の金錢を濫費せんか、妻たるものは其節儉の効あきを悟り同樣ょ濫費するに至らん。

九節　英國婦人の家政

其家に入りて先づ一考せよ、此家政の主婦は家政に巧なるや否やと、若し其家庭の主婦にして家政に注意深からんか、何やら氣持よろしく見るもの接するもの吾人に平和の氣風を與へ、愉快言ふべからず、此に反して、家政に不注意なる主婦の家庭ょ入らんか、沈鬱の氣四邊に充ち、不快言ふべからざるなり。

英國に於ては下等なる勞働者の妻にても、家政に注意すると最も深くして萬事規律正しく寧ろ幼少の時よりの風習の化して第二の天性となれるが如きを見る、彼等は一週間を小分して各曜日に七日間の事務を割當て

月曜日を以て大掃除の日となし、ブラシとソーダにて窓より、床下ストーブ便所等を磨き上げ。

水曜日を以て大洗濯の日とし一切の穢き衣服又はシイツなどを洗い清ひ。

金曜日は勘定の日にして一切の費用を拂ふ。

而して日曜外の他の日は一日を小分して。

七時頃に起き食事を用意し

十時迄に家内の掃除をなし

一時頃食藝をなして午後は縫物をなし又は來客に接し

四時に茶を飲み

夕餐後は一家團欒してピアノ室に談笑せざれば家外に散歩す。

と云が如き家政なり、否寧ろ此は習慣と言て可ならんか、何とならば彼等は無理に家政を守りしにあらず、無意識にして斯くせずんば却て不快を感ずるが故なり、斯く一家内の政治整頓せるが故に、人あり若し他の家に同居するとせんか、主婦は先づ客に『何時に起き、何時に朝餐をなし、何時に午餐をなし又何時に寢るや』と問ふ、客若し一々此に告ぐるに定時を以てすれば、翌朝より主婦は客の言に依りて家政を立て、一歩もあやまたず、客若し朝七時に朝食を取ると云ひなば、客の起き來ると否とに關せず、七時には食物を整へ卓上に陳列して、客の起き來るを待つ、彼等は概して物の違約を忌み、外出する時よても何時頃に歸るべしと告げ

ながら其時刻に至るも歸り來らざる時は『汝は約束の違反者なり』と云ひ大に其不心得を詰り、一事か万事にて少しも其人を信用せざるに至る。

十節　芝居見物

倫敦に三十九ヶ所の演戯場あり、就中最も美麗なるはドラリー、ラン、にして英國第一の俳優サア、ヘンリー、ビングと同じく第一派の女優エレンタリー嬢等は此戯場にて演伎するを常となす、アービングは世界屈指の名優にして女王より特ゑサアの位を賜はりし程の人物にて、其得意とする處の劇はセーキスピヤのドラマとなす、予は不幸にして彼の演伎を見ざりしが東倫敦に於けるアルノルド、ベン一座のダン、ミルラー物語を見たり、此は有名なる俳優ならねど、勇壯にして活潑、東部倫敦の勞働者

の喜んで見る處のものあり、芝居の筋書は日本のものとは大に異なり、平民的なり、今試みに是を記せば。

筋書のミルラーは年齢二十四五の勇壯なる青年なり、彼はアイルランドの貴族の長子なりしが、幼少より平民の苦役を悲しみ、貴族たることを好まず父母より隱れて英國に渡り、海邊の漁村に身を隱し、其地の水夫の長となり、廿余人の水夫を手下に統御し、豪氣を山間の漁村に弄す、當時地主と小作人と衝突したりしが、ミルラーは手下の壯士を率して、小作人を助け地主の家に侵入して、手斧にて主人を撃殺し、此の事政府に知れ多くの巡吏來つてミルラーを捕縛し、此を法院より引く、ミルラー法庭に立ち臆する處なく、天道と人道の歸する所を既くと云ふ仕組なり。

俳優アルノルドベンは自らミルラーを演じたりしが、彼の伎倆の巧妙なる實に無政府黨の巨魁を眼前に見るが如き感あらしめ、吾人をして知らず掌を打て快と叫ばしむ。

第四章　英人氣質

一節　信仰の國民

カーライル曰く人世の大事は其人の所信なり、然り人の所信の人世の一大事なるが如く、國民の所信は實に其國家の一大事ならざる可からず、何となれば、信仰は人間活動の源泉にして、國是の定まる所なればなり、古語に曰ずや主義ある政治家は宇宙自然の理法に基き國是を定むと、又曰ずや信仰なき國民は義にまさりて利を愛し、神にまさりて國を愛すと、然らば主義信仰ある政治家とは如何ん、蓋し英のクロンウエルの如きは信仰家ならんか、彼は曰く英國に爾は上帝の命のまゝ正義擴張の機關たれ、と彼は英國より正義を愛しぬ、正義よりも神を愛しぬ、彼の如き

は實に主義信仰ある政治家と云ふべし、然らば信仰ある國民とは如何ん蓋し英國民の如きは乃ち信仰ある國民ならんか、彼等は義務として國を愛せず、神の爲めに國を愛す、彼等の生存する所以は、一として神を信ずるの信仰に歸せざるはなし、今試に英帝に向つて其何の爲に帝位にあるやを問へ、又英大臣に向い其何の故に政府に立つかと問へ、國會議員に問へ、小學教員に問へ、老人に問へ、青年に問へ、三歲の童子に問へ、爾等は何の故に生存するやと、彼等は異口同音、天を指し答て曰く、神の爲なりと。

彼等の主義は、天國を地上に來らすにあり、彼等は神の外に信ずべく又奉ずべきものあるを知らざるなり、彼等は神以上に帝王を愛する能はず神以上に國家を愛する能はず、故に帝王にして世道を亂すが如き品行あ

らんか、臆する處あらはこそ、直に立て王者を譴責して止まざるなり、本年の夏なりき神學博士パーカー氏倫敦市敎會よりて立て英帝を攻擊して曰く。

酒は人を地獄に陷るゝの堅戸なり、然るよ英皇帝は此頃バートン卿の邸に臨み自らビールを釀造せられたりと聞く予は謹愼に且忠實よ語らん皇帝にしてビールを釀造せらるゝとせば人々はビールを飲むことを何等の害なきことと信ずるに至らん、實に皇帝の所爲は國民の摸範たるものにして此の如き所爲は大よ批難すべき事なり、又皇帝は總ての問題よ關して人間以上の見解を有されざる可からず、皇帝にして日曜日に興行場に赴かるゝことあらば國民全休の安息日の大打擊を與ふるものなり、然るに皇帝陛下は興行場に赴かるゝことあり、寺院に臨まれず（此時

會衆は大恥辱大恥辱と叫ぶ）英國寺院の長たる皇帝よして安息日を破らるゝは國民をして其例よ倣はしめんと欲せらるゝの故なるか、咄々予は皇帝よ不忠なるを欲せず、去れど予は死するとも神よ不忠なることは能はざるなり。

彼は猛獅の如く卓を打て獻身的演說をなせり、何の故よ此を獻身的演說と云ふや、曰く彼は生命を賭して皇帝を攻擊せしが故なり、嗟呼主義ある國民よ信仰ある國民、彼等は强く、彼等は動かし實に頼もしきは斯の如き國民にこそ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

二節　自助的美風

予一日倫敦よある日本の先輩に問て曰く『英國人の氣質は如何ん』彼答

て曰く『西國立志編の儘あり』と言や簡なりと雖も其實を得たりと言ふべし、スマイルス曰く、英國民どは自助の精神强く、奮起して百事に勤勉するの美風昔より風俗となれり、群集の中より崛起して其名を顯はし、古老を凌ひで英名を一世に轟すか如き人の、英國を進歩せしむるの効は之よりも少なしとなさず、去れども英國の上進するとは、微賤の民其名も知れざるほどのもの〻、同心協力より來る處も亦大なりと云ふべし、と彼等は天命に安んじて、不平なく、只々勞して而して食し、食して而して生存し、生存して而して神より奉ずるを以て人事足れりとなすが如し。

* * * * * * * *

三節　富强の原因

英國の富裕なるとは世界に著しき事實なり、去ば吾人の英國の地を踏む

に當りて先づ其富の由て來る所以より注意を惹き倩々其趣を視察するに是は必意英國に鉄と石炭の產額多きに基因すと言と雖も、其國風の然らしむる所も亦大なりと云ふべし、國風とは如何なるものぞ、人民の性質是れなり、曰く勉强、曰く謹愼、曰く老實、曰く堅忍、曰く儉約、曰く宗教心等は實に此國を富强ならしむる源動力ならずんばあらず、蓋し英國人民は所謂其日暮しの流義を好まず、沈着に後日の計を案じ、病氣災難の塲合には云々すべしと、用意に抜目なく、故に平生勉强撓まず、儉約質素を第一とし、暴飲暴食に前後を忘れて、甕中文なしとなるが如き人は殆んど絶無と云も可なり、故より料理屋の如きも單に料理のみを業とせず、旅宿を兼ねるの例なれば、暴飲暴食よは至て不便利と云ふべし。

四節　沈默せる勞働者

英國の勞働者は默して働き、支那の勞働者は叫びつゝ働き、日本の勞働者は遊びつゝ働く、ロードブラッシーの統計に依るに、英國人二人の勞働力は佛人三人に同じく、印度人廿人に相應し、日本人支那人の卅人ま相同じと試に英國の大工場を見よ、其所に數千人の勞働職人ありと雖も只機械のキシルの音のみ聞へて、絶て人々の話し聲を聞かざるべし、而して一朝去て新加坡、香港邊に來り、支那勞働者を見んか、聲を限りに絶叫しつゝ、恰かも喧嘩しつゝあるが如くにして、勞働するにあらずや更に轉じて日本の勞働者を見よ、鼠の耳に同じき小さき煙管の皿にて煙草をくゆらしつゝ、立ては眺め、眺めては座し、勞働しつゝあるのやら、遊びつゝあるのやら、判然たらざる勞働者を見るべし。

五節　相信ずる力

世界最大の英蘭銀行は、其資本金一億四千五百五十三万圓にして、倫敦日本領事館の裏街道にあり、頭取はヲーガスタス、プレベストにして、年俸二万磅なり、副頭取はサムエル、ホープ、モーレーにして、年俸一万五千磅なり、其他二十四人の管理者ありて、各々各方面に事務を分擔す、此等管理人の俸給は一人五千圓ありと言ふ、其他倫敦又は二百廿五箇所の大小銀行あり、萬國の富を運轉して、一錢と雖も空しきなし。英國の富强なる所以は實に各人相信の力の集まりてなれるものと云ふべし、例へば爰に十万圓ありとせんに英國の如き信用の盛なる國柄に於ては、或

は之を手形となし、證券となして、現金の外に猶廿万の働きをなして餘りあるべしと雖も、若し社會上に信用衰へなば、十万圓は正しく十万圓に止まり、他の無形の廿万圓は其働をなすと能ざるべし、均しく是十万圓なり、而して彼は卅万圓となり此は一物をも生ぜず、利便の相距る果して如何ん、而して此等の利便の媒介は、重に銀行の力にして、銀行は即ち信用の形よ顯れたるもの是なり、故に十人各々十万圓を有せんよりも、一銀行に一束して十万圓となし、以て充分の働きをなさしむるに如かず、去ば銀行に預金する者の多さは、其社會の信用高さの證據にして、多ければ多きよ隨ひ、ますます國富の源をおすものと知るべし。

世界中に於て英國人の如く金の取扱方に大膽なるはなし、彼等は金の收入次第自家に一錢を貯へずして、悉く銀行に預け、少しも懸念するなし

此れ銀行の制度の宜しきに由ると云と雖も、全國の風習實に之か因をなすに非らずして何ぞや。

六節　結婚の美風

英國の風俗にて青年男女の結婚の媒介たるは、實に予が先に家庭の天國に於て記せる、保隣知人相會して茶會を開き男女の隔なく座列して交際するに因するものと見て可なり、青年男女の互に遊樂する間には、いつしか朦朧の中に意氣相投合して、訪問となり、文通となり、散歩となり寺院參詣となる、斯くして次第に交誼の加るや男子の方より折を見て結婚問題を申し出ずるを例となす、去れども此れ決して自由結婚にあらず勿論日本支那の無理結婚に比すれば少しく自由なるが如きも、決して男

女二人の自由ゝ任せず、親の承認を得るは最も肝要のことにして、若し親の言に依らずして、猶ほ其思ふ所を果さんか、時に或は親子義絶の場合なきにしもあらず。

茲に若し親の許を得て結婚の約ならんか、兩人は他日一家を立つるの料を造らんが爲め、奮發勉强するとなれば、仲々容易に契約の履行の時季に達せざれども、將來生計の見込立ざる以上は、漫に結婚せず、唯將來ゝ望を屬して自ら勵むの一事あるのみ、或は議式前情慾の迷す所となり亂れんとするとあれども、多くは女子の方より勉めて之を拒むは結婚前の一大役目にして、唯將來〳〵とて一は以て男子の奮發勉勵を促すの手段となす、故に英國にては結婚前に亂るゝものは、結婚の終を完ふする能はざるものとして、深く之を咎むるなり。

彼等男女は所謂エングージメントとなりし以來、短きは二三ヶ年長きは六七ヶ年も生計の用意をなし、充分獨立一戸を構るの見込立ちし時に寺院に至り神前に誓て、目出度き局を結ぶに至る、去れば結婚後離婚を見ること少く、此を吾日本の無謀なる結婚に比し高尚なること幾許ぞ、見よ吾日本に於ては結婚者一万人につき離婚者三千五百五十六人より三千八百十八人を生するに至るにあらずや、然るに英國ゝ於ては離婚者僅かに九人を生ずるのみ英國の風と日本の風と何れが是か何れが非か。

七節　体育と衛生

体育と衛生を學校生徒の專業たらしむる勿れ、此は車夫も馬丁も農夫も職人も皆な要する所のものなればなり、古語に言ずや、壯健なる躰軀に

豪壯なる思想を宿すと、眞なる哉言や、予の歐洲旅行を終て日本よ歸り來るや見る所の人々皆肺病患者の如く、氣力なく、温和なる所なく、世界的なる所なし、適々强壯なる人を見るも、此を西人に比すれば、實に未成年者の躰格と云の外なし。

英國は氣候惡し、倫敦の霧と云へば世人の知れる有名のものなり、故に英國人は昔より体育と衛生に注意し、終に天然に勝て今日の盛大を見るに至れり、人の力も亦大なりと云ふべし。

彼等は食物としては牛肉、羊肉、牛乳、鷄卵、野菜、果物、麵包の如き滋養多き物を食し、他の方面に於ては、各町に設けある、運動場に出で男女老幼混じて体育に餘念なし、而して運動の方法に至ても、夏分はクリケットを遊び、冬分はフートボールを遊ぶ、と云ふが如き風習あり、毎日午

後七時より勞働者等は此所に至り、激烈なる運動をなし、精神を爽快にし軀を練磨し日に日に怠らざるに至ては、彼等の運動好きなる實よ驚くの外なし。

八節　優しき交り

東洋流よ禮儀と云へば、嚴然たる、坦然たる、冷然たる所ありて、何となく恐ろしき氣味あり、吾等の如き氣の弱き者が、若しも禮夫子の前よ出でたりせば、或は恐れて戰慄せしやも知る可からず、西洋にて禮儀と云は全く此に反し、優しくして親み易すきを意味するか故に、グラッドストン氏の如き人にても、甚だ親しみ易すかりしなり、東洋の禮は敬の一にして、西洋の禮は親しみの一ならんか。

予の蘇克蘭に旅行せし時、滊車の客室滿員にして、予は倫敦よりバーミングハムまで立ちつゞけなりしが、傍の紳士予に告て曰く

東洋の紳士何所まで行くおるや。

然りバローまで旅行しつゝあり。

ハヽ然るか、バローとはランカスターの先き、此よりまだ程遠し、予はカンホース停車場まで行くなるが、貴下も予と同額の賃金を拂いしなるに、予等のみ椅子に倚り、貴下の佇立するとは氣の毒なり、一時間づゝ交代して椅子に倚るとせん、實は予も幼少の頃より印度に生活し三年前英國に歸りしものゝて、東洋人を見ると何やら、なつかしい思かする。

此より予と此紳士とは、カーンホース停車場まで、一時間づゝ交代、

り、其他彼等の優しき氣風は短かき旅行中にも、其室内に滿ち老人の乘り來るあれば手を引いて此を助け、手荷物を携ふる少女あれば此を運んでやり、一人の妻君の小兒を抱くあらば、吾も吾もと小兒を抱かせよと乞ふて此を愛し、一時間程の滊車旅行にて、十年の交際をなしたるが如く、離れる時に落涙する人のある有樣は、實に彼等の優しき性質と云ふべし。

九節　宗教狂ゝ

英國人は宗教狂いなり、彼等は安息日を嚴守し、安息日ゝは一錢の金だも使用せず、一錢の物をも賣らず、去ば平生の繁華ゝ引かへ、日曜日にロンドン市の寂寥たると、道路一人の通行人を見るおし、去ば此多くの

市民は何所に在りやと云ふよ、彼等は皆家内に閉居し、祈禱をなし、又は聖書を讀み安息日を嚴守しつゝあるなり此を吾國の上野邊の、日曜日に於て平日より人出の多きよ比すれば、果して如何んぞや、吾國の日曜日は國風を亂さん爲の日曜日なり、英國の日曜日は國民が精神を修養する聖日なり。

十節　不文の法律

不文律なる憲法の實行さるゝ國なれば、國民一班法律よりも習慣を重んじ道を歩くよりも、人を訪問するにも其れ其れ不文の約束ありて、社會の秩序を亂れざらしむ、一時飛ぶ鳥も落す勢ありしジルクでさえ、此會社の不文律よ觸るゝ時は地底に蹴り落されしよあらずや、英國の如き國は

實に法律なくとも能く治り得る國と云ふべし。

去ばロンドンの巡査の如きも、劍を帶ぶるなく、手に手袋を握り、此を上下して街頭に立ち、以て巨万の人民を指揮しつゝあるなり、此を佛國白耳曼の長劍を提して、横行する警吏に比して何れか文明的なる、

第五章　倫敦案内記

一　人口及區劃

千八百九十一年の統計に依れば、目下倫敦に住する人口の數は四百廿三万一千百四十一人なり

倫敦を驛遞局の便利上八區より別つ(一)はイースト、セントラル區にして中央郵便局の邊にして倫敦に於て最も繁華なる所なり、郵便等にては(EC)の符合を用ゆ、(二)はウエストセントラル區よりして(WC)の符合を用い、(三)はイースタン區にして(E)の符合を用い、(四)はノルサン區にして(N)の符合を用い(五)はノールスウエストン區にして(NW)の符合を用い(六)はウエスタン區にして(W)の符合を用い、(七)はサウスウエスタン區にして

(SW)の符合を用い、八はサウスイースタン區にして(SE)の符合を用いらる。

二　郵便局

倫敦全市の郵便事務員は總數一万人にして、其郵便受取局の數は千五百なり。先の八區内にて一ヶ年内に取扱ふ郵便數は實に六億通なりと云ふ

三　上等馬車及乘合馬車

所謂上等馬車の數を擧ぐれば、二輪一頭馬車千五百輛、四輪一頭馬車四千輛、自動馬車、一百輛にして、官許を得たる、馬引の數は一万人あり、其一日内に彼等の得る處の賃金は十二万圓なりと云ふ、豈夫れ驚くべき巨額ならずや。

乘合馬車は全市に千六百輛あり、一万四千頭の馬此を引く、其一週間内

の一輛収入金額は百六十圓なりと云ふ。

四　水及瓦斯會社

倫敦ゑ水會社八ヶ所あり、其資本金は實に一億四千万圓にして瓦斯會社の資本金は一億六千万圓なり。

五　巡査の數

全市を警護する巡査の數は。一万五千八百九十人にして、百九十三人のテームス河上の巡査あり、加ふるに警視廳の消防巡査六百五十人を以てす

六　有名なる建築物

(一)ブリテッシュ、ミュージャームは、英國最大の博物館にして、中には世界一の大書庫あり、ギリシャ、ローマ、エジプト、リジャ、スカンデネビヤ、ブリテッシュ、の珍物奇器一として集められざるはなく、中に本願

寺の僧衣、利休の茶器、小野小町の肖像、五月の節句の書幟なゞ陳列しあるに至ては、驚くの外なし、此館内にて最も目を喜ばすものは、數十と陳列さるゝ埃及のミイラなり。

ミュージャーム内にある世界一の書庫は、千八百五十年の建築ゑかゝり其費用は百五十万磅にして、今其構造の大略を示せば、室は宏大なる圓形の一室にして四壁の棚ゑは巨万の書冊を裝り、其高さ百六呎、吾人をして人工の巧妙を歎美せしむ、ブリテッシュ、ミュージャームを見物するには無料ゑして、朝の九時ゑり、夜の七時迄、自由に出入することを得、但書書室ゑ入らんとするには手續を要す。

(二)バッキングハム、パーレス、はセント、ジャメス、パークにあり、英帝の住宅にして、帝の不在中は世人の觀覽を許さる。

(三)ハンプトン、コート宮は元カーデナル、ウヲルセーに依り建築されしが、後彼は此宮をヘンリー三世に献上したり、倫敦を距ること七哩のテームスの河上にあり、夏期は倫敦橋下より小蒸汽船往來す。

(四)ハウス、ヲフ、パーリヤメント、英國議會にして一名ウエストミンスター新宮とも呼ぶ、千八百三十六年サア、チヤーレス、バレー氏に依り建築せらる、其建築費は二千万圓にして、テームス河の右岸に當り長さ九百呎の美しき擣造は即ち是なり。

(五)モニユーメント、此は千六百六十六年のロンドン大火の紀念碑として ロンドン橋の北方にあり、高さ二百〇二呎にして、四邊の壯觀を添へ、是を建築せし人は有名なるサア、クリスト、ヘーレン氏なり。

(六)マンション、ハウス、今年伊藤博文氏の饗應せられし、家屋なり、是

はロンドン府長の事務所にして、英蘭銀行の向にあり、一千七百四十年の頃ロンドンより程遠きポートランドの石を以て建築せられしものにして、其費用は四百万磅なりと云ふ。

(七)マルボロー、ハウス、はジヤメス公園にありて先にはウエールス皇太子の市住宅なりき此家屋は一千七百九年の頃先にモニユーメントを建築せしサー、クリスト、ヘーレン氏に依り、建築せられ、マルボロー公の住宅たりしが、後王官となれり。

(八)ローヤル、エキスチエーンジ、英蘭銀行の向にあり、千三百四十四年ビクトリヤ女王に依り開かる、誰人にても内部に入り觀覽を得べく、中には世界萬國の富商多く集まる。

(九)聖ポール、チヤシードル、有名なる、セントポールなり、倫敦大火の

後七百四十四万磅餘よて建築せらる、家の長さ五百十呎にして、幅二百八十二呎あり、其周圍は二千二百九十二呎ありと云ふ、毎日曜日午后三時より、此所に於て世界有名の説教家來りて、説教をなす、内部は五六万の人を入るゝことを得べし。

(十)タワアー、ブリッジ、此れ有名なる倫敦の塔橋なり、七百五十万圓よて千八百八十六年ウヲルフバレー氏よ依り建築せらる、兩側より開閉する橋羽は其重量九百五十トンにして、吾人をして實よ英國工業の發達に吃驚せしむ。

(十一)ロンドン塔式は此は羅馬の英雄シーザーの初めて居を定めし所なりと、此れ英國王室の牢獄よして昔より此塔内よて多くの無罪の血は流されたり、昔は内部に獅子窟ありて罪人を此穴に投じたりしが、今日は

此の獅子はレゼントパークの動物園に移されたり、英國史を讀む人は皆此塔の名を聞くと共よ彼の佳人ジャン、グレーのことを思い落涙千行きたるべし。

(十二)ウエスト、ミニスタル、アベー、即ち是れ英國敎の本山、ウエスト、ミンスター寺院なり、内部よシエーキスピヤドライデン、等の詩人又グラッドストン、ビーコンスフィルド等の政治家及歴代英國々王の墓地あり、誰人にても内部に入り觀覽することを得べし。

七　ロンドンの船渠

(い)セント、ガサリン、ドック、千八百廿八年の創設にかゝり、ロンドン塔の東方にあり。

(ろ)ロンドン、ドック、千八百五年の　創設にかゝる。

(は)イースト、ドツク、も廣大なるものなり。
(に)リミハウス、ドツク。ステツプニーの東よあり。
(ほ)グランド、サリー、ドツク。ローリツチの東にあり。
(へ)コンマーシヤル、ドツク、は七部よ分れ何れへも多くの船を入るゝことを、得べし。
(と)東西インジヤン、ドツク、千八百二年の創設よかゝり、吾人をして近江の琵琶湖よあらぬかと疑はしむる程大なるものなり。
(ち)ミルウエル、ドツク、ヴイクトリヤ、ドツク、ローヤル、アル、バート、ドツク等皆大なるものにて日本には斯の如きドツクは一もなし。

八病院

(い)ベツレヘム病院、通常世人は此をベツドラムと呼ぶ、千八百十五年の創

設にかゝる。
(ろ)チエルシエ病院は千八百一年の創立よかゝり、軍事病院なり。
(は)フチンドリンダ病院、ギイルホード街にあり、一千七百三十九年トーマス、コラン氏に依り建築せられ、目下兒童の患者を重に看護す。
(よ)グイス病院トーマス、グイス氏に依り設けらる故に此名あり、グイス氏はロンドンの本屋の主人なりき。
(ほ)聖バルソロミユー、病院、西スミスフイルド、にあり、一千百六十二年に設けらる英國の病院中最も古きものにして、何故に聖バルソロミユーと云ふやと云に、古、一人の殉教者スミスフイルドにて火刑に所せられしとありし故よ、其人の名を取りてかく呼べるなり。
(へ)聖トーコス病院ビクトリヤ女王が千八百七十一年に主となりて設けら

れしものなり。

其他倫敦よは十五の大なる病院あれども、今ゝ此所に記せず。

九　市　場

(い)リビングスゲート、市場、ローヤア、デームス街にあり、英國第一の魚市場なり、一ケ年内に取引する魚の價は二千万磅なりと云ふ、毎日五時より、八時迄開會す（日曜日外）

(ろ)ボロー市場ロンドン橋の南にあり、ロンドン一の青物市場なり、

(は)コベント、ガーデン市場、此れ亦英國一の野菜、果物、花の市場なり、ベッドホード公の所有に属す。

(に)リーダン、ヒル、市場此れ有名なる肉類の市場なり。

(ほ)メトロポリシヤン、ミイート、マーケット、はスミスフィールド、よりも六百廿五呎の長さにして其幅は三百四十呎なり、千八百六十八年の創立にかゝり其費用は二百万磅なり。

(へ)ニユー、キャツトル、マーケツト、はコツペジハーゲン、フイルドニあり千八百五十四年の創立よりかゝり、四百万磅の費用を要せり。

十　博　物　館

(い)ビチナル、グリーン、博物館西ケン、シントン博物館の支部の如きものなり。誰人にても自由に出入するを得べし。

(ろ)ブリテツシ、博物館のことは已に記せり。

(は)西ケンシントン博物館には、建築、彫刻圖畫、等多く集められ中に大なる其種の畫書室あり。

(よ)動物學博物館、西ケンシントン、のクロムエル街よあり、千八百八十

一年の建築にかゝり、日中は誰人にても自由に觀覽を許す、中に動物學の書書館あり、天下の動物學者皆此所に集まる者多し。

（は）印度博物館西ケンシントン街にあり、印度の事を研究する學者多く集まる。

（へ）日本、支那、波斯、博物館は印度博物館とインペリヤル、インスタデユートの間にあり。

十一　公　園

（い）バターシー公園は、百八十七エークル（一エークルは日本の千二百二十四、一二七坪强なり）の廣さにして、三百十一万磅よて設けらる。

（ろ）ブロックウイル公園（ーン、ヒルにあり七十八エークルの廣さにして、百十七万五千磅の創設費を費さる。

（は）カンバーウイル公園十四エークル半の廣さにして首府公園會社よて設けらる。

（ほ）クリツルド公園ストック、ニューイングホンにあり。

（ほ）グリーン公園有名なる美しさ公園なり。

（へ）グリーンウイチ公園グリーンウイチの近くにあり。

（と）ハンプステツド、ヘーチ公園、二百四十エークルよして千八百八十六年三百一万磅にて作らる。

（ち）ハイバリー、フイルド、二十七半エークルあり。

（り）ハイド、パーク、三百八十八エークルあり、レゼント公園と共に倫敦の二大公園なり、早朝此公園に至ば英國の貴族の男女盛裝して騎馬にて散歩するを見るべし。

（ぬ）ケンシントン公園は二百一エークルあり、ハイド、パークの西部にあり て此公園の西部にケンシントン王宮あり即ち是れ女王ビクトリヤの誕生せられし所なり。

（る）レゼント公園四百七十エークルあり英國の公園中最大なるものにして中に天下よ名高き動物園あり。

其他レベンスコート公園、聖ジヤメス公園、サウス、ウエク公園、ビクトリヤ公園、ウアターロー公園、ウエンブリー公園、ウエルムウート公園、及び數十の公園あれとも紙數多きに過くるが故茲に記さず。

十二　書　館

（い）國民書館は最も有名なるものにして、中に天下の名書五百五十枚あり其書の價格は五百七十五万圓にして、就中最も高價なるはラフエルの書

にして一枚七十万圓のものと、バンダイクの筆になれる同じく一枚十七万圓のものとベロヰスの書ける一枚十三万六千五百圓のものと、コレジヲに依れる十一万五千圓のもの等なり。

其他有名なる廿五畫館のロンドンにあるありと雖も此れ亦、却て讀者をうはしむるの恐あるが故に除けり。

十三　其他の雜事

（い）ロンドンには勞働者又は商店の集會する大なる倶樂部卅八ケ所あり、

（ろ）ロンドンにて有名なる專門學校はロンドン大學を始めとして十三ケ所ありロンドンに學校の比較的に少なきは此を商業地にして勉强に不便なる土地なるが故なり。

（は）ロンドンよ有名なる寺院はセントポール、又はウエスト、ミンスター

を始として、五十一ヶ所にあり小なる寺院に至りては無數ありと云ふべし。

（に）ロンドンには十ヶ所の墓場あり。

（ほ）ロンドンには廿七ヶ所の音樂堂あり。

（へ）ロンドンは四十一ヶ所の芝居場あり。

倫敦に行れし人は先づ精しき市内地圖を求めよ、英蘭銀行を忠心と定め其圖に依りて、東西を見物せらるべし、然らずんば日に日に道に迷ひ、毎日迷子となるが如きとあらん。

第六章怒濤一萬二千里

一節　黑き煙を後にして

予は昨秋九月大略倫敦見物を終りしかば、名殘つきせぬ世界の大都を後にして日本に歸航することゝせり。

アルバー、ドックに碇船せるジャパン、メールに乘り込ば、早や出立も近まりてん、マストの頂邊には出發旗飜り、乘込み來りし四十余人の外國船客は分れとなれば殘る言の葉、彼方此方に胸に浮べる離別の辭。

アノ新加坡の兄上にネ、よろしくと申してよ、！ソレカラ妹にネ、明年の夏頃には一度ロンドンに歸る樣に申して。

グッド、バイ身体を大事に、長い旅なれば、グッド、バイ

一時に四方に起るグッド、バイの聲流笛一聲鳴るよと見へしが早や棧橋は取られて、船躰は埠頭を去て動き初めぬ、送れる人送らるゝ人は互に白き手巾打振りつゝ、船の恰かも鳥の如く小さく見ゆるまで離別の情を惜み居たりしが、今は早や霧か雲に包まれて懇しきロンドンの煙突も地平線下よ沒し終りぬ、噫離別程悲しきことやはある。

九月三日音よ名高き天下の難所ビスケイ灣も事なく過きて此所は名代のジブラルタル、彼方に見ゆるはトラフアルガルの海戰場なり。

二節　佛國マルセイルの彌次喜太

君マルセイルに上陸して見物しよー！

好かろー、而し此間い夜にか？

かまうことが電氣燈があるから

予と予の同行の一友とは、かく語りつゝ棧橋を下り、佛國人の短艇に飛び乘り、埠頭に上りて馬車を雇い彼方此方と見物を始めぬ。

イヤ君佛國の風俗は大にロンドンと異ふよ、女でも男でも帽子を穿たないで散歩などして居るね、驚た、女が立小便して居るね、乱暴だね。

ソヲサ君此國に乱暴なる革命などのある所以は國民の氣風かフノ今の立小便の女と同然だからだ、魯西亞の虚無黨の巨魁クロパトキンの妻君は、ロンドンで自由の身たらんより巴理で牢屋に居る方が好いと云たろふだが、ロンドンの自由は嚴肅で佛國の自由は立小便さ、大よ國風が異ふわい。

君美人が多いネ、英國の棕櫚の毛とは異い、フランス娘は日本的だね

髪も目の玉も黒くてサ、何ふかい、フランスの兵學校の生徒の乱暴なとは、日本の學生を乱暴だと云がフランスの青年に比べると豪壯だね、日本の學生は栗鼠の如くフランスの青年は貂の様だ、ヤア向のはビーヤホールか盛んなものだ、三千人位も一所に飲で居るネ。

眞乎に能く飲むネ、女のドリンカーの多いことは何ふだ、彼等は人世を酒中の夢とせんとして居るのだ。

時計を見れば既に夜の八時恰かも舊暦八月の中旬なりければ月は高くヤルセイルの山端に懸り、吾人遠征の客をして痛歎轉た已む能わざらしむ、予一友を回視して曰く時既に初更を過ぎ月亦清し、吾等徒歩し埠頭に出で明月に浮で歸船する亦快あらずやと、即ち馬車を下りて徒歩埠頭の方に歩行したり。

ムム暗いぞ、何だ向ふで高い聲を出して叫んで居るのは、夜中に放歌とは日本よりも野蠻だ。

あれかフランス歌だ、イヤイヤ君驚くなかれ、彼の家の前には澤山の婦人が列座して居るぞ、何ふだ吾輩大に膽力を振い興し、彼の女群の中を突貫して見よをか。

予等は手に手を取り女群の中を通り過ぎんとせしが後部より覺束なき日本語にて。

アナタ、アナタ

と叫びて予の腰をシッカと抱きしは慥かゝ先の女群中の一人なり、予は惡王ベルゼブルに擁されしよりも恐ろしく。

ヤアヤア君よ君よ助けて呉れ給へ僕は捕虜となつたぞ君助け給へ。

と叫びしが先方なる友人も既に予と同然フランス姫の捕虜となりし樣子あり、予一生懸命憤闘せしが、病身なる弱き吾か力にて、彼等女軍に勝ち得ん筈もなく、帽子を取られ、上着を取られ、眼鏡を取られ、終に予の身体をも擔ぎ去りて、何所とも知れぬ怪しき一室に置かれたり、而して其所には既に予の友も來り會しぬ。

君何ふする、怪我はせなかつたか。

何に君怪我をするものか、何も悪意があるではなしよ。

君大ふすまして居るネ。

僕は先刻から此所に來て大に彼等を相手にフランス語を研究しつゝあるのだ。

馬鹿を止せ歸るを早くせんと通い船がなくなるぞ。

余等は計らず女難に會し、二人して六フランを奪われ呆々然として歸船せし時は既ふ午前一時に近く月は山端に沈んで四邊闇黑なりき。

三節　船内の品評會

長き旅路の徒然に語りつくれば珍らしき談話もなく、只理由もなきことにから〳〵と高笑して打與するは船内の有樣なり、予の同船せる日本客は上下合して六人なり。今其人柄を品評すれば次の如し。

蜥蜴の乾物先生、蜥蜴とは野に這ふ青き四足の虫なり、何の故に此人を蜥蜴先生と品評せしやを云ば其面相体格甚だ此虫に類似する點多きが故なり、彼は東京帝國大學醫料の教授にして有名なる精神病學者なり。

だぼはせ先生、　此人物は英國に在ること四年チャキ〳〵のハイカラなれども何分其面相だぼはせに似て可笑しく、新加坡より日本の醜業婦を見て、七八回唐臼の如く禮拜せしてふキザ男なり。

海貌の乾物先生、　此はカブト、ビールの株主の子として獨逸にビール研究に行きし者なるが、睡眠の時に、腹よりかけて罩丸迄を出して、鼾聲高く眠むるが故に斯くは呼べり。

廣東の行者、　此れ即ち同船客の予を呼べる品評語として、予が髪を長くし、髯をもうらず、眞白の木綿衣を着し、放言高論するが故に斯くは云へるならんか。

駱駝、　此れ船員長を務むる人物にして、其顏の長くしてアラビヤの駱駝に能く似たるが故なり。

鼬鼠、　目圓くして小さく、其顏の形は四角にして口邊には三四本の髭を蓄へ、時々奇聲を發して、落語家の眞似をなすは、いたちの長所として、彼は農商務省の留學生なり、

予は此上品評せざるべし、船内より互に落語する時は一同皆此品評語を使用するが故に、門外漢の此を聞く時は、チンプンカンプンにして少しも解し得ざるは當然なり。

君今此方にだぼはせは來なかつたか。

來ないよ、而し先刻だぼはせは君の所に行たぜ。

ソウカ今僕はだぼはせと駱駝の所より行て相談することがあるのだ。

ソウヵ駱駝は今、室に居るかネ、蜥蜴。

何だ夫敬な蜥蜴だなんて、鼬鼠の野郎が。

イヤ見物見物！蜥蜴と鼬鼠とやつて居るぞ。

東京に歸りなば各々一家の主人、妻もあり子もあり、一は博士の名譽もあり一は收入多き機械店の主人でありながら斯くも多愛なく戯れ遊ぶとは實に愉快のことならずや。

四節　船客の洋行奇談

同船の客にして予と其室を同じくする一人の粋人あり、彼は予の先に鼬鼠と品評せし人物にて帝國大學農商務看の屬托を受け醫術機械研究の爲に獨逸伯林に留學せし者なり、彼常に一個の婦人用の時計を出し、此に接吻し、此を頬よ當て、此を抱き、而して愁然として涙を垂る、夜間眠につく時は此を枕下に隠し、翌朝に至れば、先つ取り出して注視しつ泣くて

と前日の如し、余甚だ不審に堪へず、或日彼に問て曰く『請ふ其時計の謂れを聞かん』と　即ち談じて曰く。

イヤ此には深い仔細かあるのだ、僕が去年の四月伯林に來て『蜥蜴の乾物の所を訪問すると、其家は仲々深切な家であつて、通り一偏の宿屋とは大に異ふ、即ち僕は其内の二階を借りて、滯在することゝなつた。、、、然るに、然るに、モ一ツ然るにだ、其家の主人と呼ばるゝフローラインガだ、當年取て十九歳と云ふ絶世の佳人でゐるのだ、、、、何だか語に身が入つて來たぞ。

而して彼れフローラインは近邊の芝居に伎を演ずる、女俳優であるのだ、然るに茲に一大事件が起つたのは、フローライン、ハウラが僕に惚れて居ると云ふ一件だ。、、、

已惚れたか？

僕は初めは信せなかつたが、フローラインは『蜥蜴』を通して僕ゑ其を告げた、之加此頃は戀病にて食物も進まず、毎夜發熱するから今夕は通夜の看護をして呉れと云ふのだ、モー此からは君の御察しに任せる、此時計は卽ち伯林を立つ時の彼女の贈物であるのだ、而して此中には大切なる一物がある、、、、而し此は見られない、大秘密だから。秘密となれば見たいものだ、見せたまへ。！

此れさー！

と指頭ゑて示せるは確に玉蜀黍の毛なり。

君其は何だネ

御察しが悪るいな君も、此は獨逸に於ける風俗だ、相愛する男女の分離

れる時に大切なる此毛を送るのだ此はフローラインバウラの毛だ。

ウははは、、、、馬鹿な馬鹿な、ウは、、、、

船の埃及の蘇西に到るや『鼬鼠』は予の上陸するを聞き、一本の書留郵便を托しぬ而して予に告て曰く『大切なる物内部にあればよろしく』と予疑念先づ生じ、卽ち表面より光線ゑすかして内部を覗ふに黑き色せる毛の一束として内部に封入しあるを見る、さても〳〵彼も亦涙の種を送りしよな。

五節　印度慷慨之客

今夜ベンガルの灣頭孤月弓の如く、冷風南極より吹て意氣も自ら昂然たり、遙に北の方に當り乙星河のたなびく所は此れ印度大陸ならんか、仰て

天に對し俯しては海濤の白さを見る大丈夫國を去て三千里、感慨何ぞ極まりあらんや、靜かに背後を見れば一人の客あり、悵然として默想、恰かも予と同じく感慨の人なるが如し、予即ち問て曰く

君は其れ何所の人ぞや。

彼答て曰く

予は印度カルカツタの產なり、久しく印度の內地にありしが事々志と違い、壯圖を構へて濠多利洲に行かんとするなり、英雄漂泊して紅顏老ゆ、東西古今轉た吾人をして痛恨に勝ざらしむ、而して君は其れ何所の人ぞ。

予答て曰く

予は東海の客なり、幼にして天下の志を抱き、支那大陸に在り劃策すると四星霜、同志多く奸吏の手に斬られて事なるなく、今や殘徒ありあると雖も革命の氣既に消へて、又案を打て慷慨するの人なし、噫天事人事何ぞ其の不如意なるや、去て歐洲に至り同志を得んとするも歐人徒に利を好み、一人として又吾人に與するなし、噫英雄漂泊して紅顏老ゆ、實に君と予と同じく是れ同感痛恨の客ならんとは。

彼予の言を聞き慷慨眞ょ勝へざるが如く、左右を顧みて靜かに告て曰く今や吾印度大陸は英國の屬となり、重稅民に迫り苦役骨を折る、苟くも獨立の氣ある者何ぞ座視するょ忍びん、噫印度洋より崑崙山に至る此大陸、一に同胞に獨立の氣なきか故に西人の奴隷たらざる可からず、予等同志數百人、印度獨立のことを志し茲に苦心すること十有餘年、而して土人多く內部の小事を爭ふて一國の大事を知らず、絕て吾等に應し

て提身蹴起する者なし。

と悵然とし又涙を垂る、嗚印度、嗚印度、斯の如きの義士あるも獨立し能ざるか。

六節　海濤又海濤

地中海の彼方にチユニス市を見し時より、カペス灣よかゝれば八方に陸地を見ず、唯途中よてマルタ嶋を左舷に見しのみ。

英國テームス河を出てより地中海の海路を十一晝夜よて終り、此所は埃及の蘇西運河、ポルトセットにて上陸し埃及亞剌比亞の風俗を一覽して、再び船に歸れば船は既よ運河案内のパイロット船用意出來て、直に運河の船路にかゝる、夕景の頃はいまれば涼風は茫々たる亞剌比亞の彼方よ

り吹き來り、只でさゑ無限の感の浮びぬべき此風光に。加之も舊約時代のモーゼ、ヨシユヤのとなぞ思い出でゝ、感慨の上に一層の感慨をころ增しぬれ、今一群の駱駝隊は運河の畔路をたどりつゝ進み來りしが、今夜は此砂漠に野宿するならんか、テントの用意をさゝなり、同行中白井學士あり、一狂句を吟して予に示す。

日ざりのやけ砂原よくらべては
駱駝らくだというぐ一むれ。

予は此より亞剌比亞海紅海を經て印度の錫倫嶋よ達しぬ。

七節　印度の乞食小僧

船のコロンボに至るや、板に乘れる印度の乞食小僧等は、波をし分けて、

船客を見舞い來る、而して而白き印度音にて唄ふ所の一の歌は

たらゝゝぼんべや、たアらゝゝぼんべやい。

たらららゝゝゝゝぼんべや。　　たらゝゝゝゝアッぱば。

彼等は唄いつゝ旅客に促して銀貨を海中に投せしめ、競ふて海中よ潜入し此を拾い來る。

アラアラあらゝゝゝゝ

ゼントルマン、ヲーライト、ヲーライト、ヲーライト。

廿錢銀貨を此青い海の底に投げて下され、私等黒人仿の小僧が水底に潜入して拾つて來ます。

ヲーライト、ゼントルマン。

今や一人の紳士英貨六片を力を込めて水中に投げしが、小僧等は皆水中に沈んで海面に一波起らず、彼等は水中にて此を求めつゝあるならん。

八節　南洋の俠士邱君

十月一日ベンガル灣スマトラ海の航海を終りて新加坡よ至る、予は直に上陸して天南報館に、志士邱君を訪ふ、未だ一面の識なしと雖も、久しく文通を以て知れる人なれば一見して恰かも舊知の如く、胸襟を開て快談盡る所を知らず、君は福建省の人幼少の頃より新加坡に來り銀行事業に從事し巨万の財を作る、雖然彼の欲する所のものは財にあらずして他にあり、他とは何ぞや卽ち清國を改善して自由の國とおすにあり、彼は第一着手として自ら天南報と云へる新聞を設け馬來半島及南洋諸島よ散在

する四五十万人の支那人を救へんと欲しぬ又先に康有爲の北京の事破るゝや、全心を以て彼等に同情を表し、康黨の志士彼の食客として一命を全ふする者も亦甚だ多かりき、彼最も唐才常の人となりを愛し、一昨年唐等の哥老會を卒して、武昌城を畧せんとするや、自ら三万元を送りて此を助け、大に革命の事を助く、後唐等事破れ斬刑に所せらるゝや、天下の事又成し難きを歎じ、再び南洋に潛んで事機の至るを待つ、惜むらくは彼身体瘠せ衰へ壽命翼ふ可からず。

九節　嗚呼哥老會の頭目唐才常君

指を屈すれば今は早や四星霜の昔なり、予唐才常君等の召に應じ、南清の事を抛ち走て上海に至り、其部下林、田、季、沈の四君と共に湖南省長沙府

に至り、哥老會の本部を確立せんとせしとあり、不幸にして小人の讒る所となり、此を成就すると能はず、即ち去て上海に出で正義會を創立し天下の志士を糾合す、來り會する者甚だ多し、當時南洋の俠邱君等三万圓を送り來りて曰く請ふ天下の爲に此を用いよと、此より正義會の名天下に高く革命の氣南京附近に滿つ、然るに予上海に於て病を得、唐君等と事を共にすると能はず、殘念やる方なきも去て日本に歸る。

越て明治卅三年義和の一團北方の野を荒すや、正義會の一群は唐才常を推して頭目となし、湖北省武昌城を畧して張元洞を斬り、首都を此所に定め天下を統一せんと欲し、自ら數十万圓の贋造紙幣を發し、長江一帶の哥老會員を集む、噫當年の唐才常實に大膽なりと云ふべし。

沈克誠等大通縣に兵を擧げて官軍と戰い、漢陽城にも亦匪徒蜂起して大

遁に應せんとす、當時唐才常漢口の英國居留地に在り、將ま夜に乘じて東西の勢を合し、一舉武昌を略せんと欲す、然るに天なる哉命なる哉、事張之洞の知る所となり、當年三月中旬夜に乘して官兵唐才常の住居を包圍し、彼及び彼の同志六十餘人を縛し此を武昌城外に斬る、才常其時逍遙として動する色なく、聲夾やかに長詩を吟じて笑て死につけりと云ふ、此事件にて斬刑に處せらるゝ者二百五六十人、予の同行せる四人の内三人は斬られ僅に一人を殘すのみ、噫天なる哉、命なる哉東西古今志士苦心多しと言べし。

十節　醜業婦の世界的運動

アンタどつから歸たのう。

ヲンダ木曜嶋からばのう

日本さゑ歸るの、又何かへ行のかの。

ヲンダ此度はメルボルンさゑ行こうと思てるの。

ソヲの、ヲンダ新加坡もいやになつたで、今度カルカタでも行て見ようかと思てるの。

日本の男子の怯懦なるに引かへて、醜業婦等の大膽さ、實に驚の外なし彼等は世界の道樂者を相手どり、萬國を蹂躙せんとはするなり、見よ香港に新加坡よ南洋諸島にメルボルンに、蘇西に、印度に　更よ進んでは亞非利加のケープ、タウンに、至る所に彼等は樂天的放言を試みつゝあるにあらずや、予の歸航中七人の醜業婦は、予等の船室よ押し込み來りぬ彼等は皆千圓以上の金を儲けて五年ぶり、又は十年ぶり日本見物に歸り

つゝあるなり、就中七人中の優物「長崎の於中さん」は一万五千圓の大金を所持なし、吾人をして其手腕の巧妙なるに驚かしむ、彼女は言ふ。

新加坡に居て五百圓つかつた、而し日本迄往復二千圓のつもりだからかまわん、日本に行たら東京に往て、帝國ホテルに一ヶ月も下宿して東京見物でもしませふ。

予等は英國より歸るゝ三百の金なくして、二百圓のステレージゝて僅かに歸るゝを得た身分なり、而して彼女は僅か新加坡より日本に歸るにさゑ千圓の旅費を用意す、金で浮世が渡れるならば予も亦醜業婦に與せんかな然れども彼等の行は正義ゝあらず。

十一節　三度香港に至る

香港ゝ上陸して直に中國報部ゝ至り友人陳白君を訪問す、彼は興中會の巨魁にして三合會の頭目なり、幾度か事破れて今や專一に文筆の人となる、予は陳君と快談數刻ゝして去て澳門行の船に乘り澳門に遊び、醜業婦の家に一宿して多くの舊知人と交情をあたゝむ予の友人澳門に五六十人ありと雖も既に四方に散じて僅かに張家の一族を殘すのみ、僅かに二歳を隔てゝ此地に來れば、今や隔世の感あり、天事天事何ぞ其れ變り易きや。

附錄小憤慨錄

一節　此銷沈せる國民

歐羅巴各國は何となく陽氣なり、旭日の將に地平線を離れて東天に中せんとするが如き勢あり、男も女も生氣全身ょ充ちて意氣も又磊落、其笑ふや獅子の如く、其怒るや虎の如し、一度歐州旅行を終りて日本に歸り新橋停車場より下つて、行き交ふ多くの人々を見れば、其顏色は澤庵漬の如く、憔悴して生氣なく、道にて出逢ふ人の內にて、眞人間らしき血色の人は、唯々兵士あるのみ、而し兵士も十中の五六は澤庵漬なり、此れ全く歐州人よりも飼葉の惡しき所爲ならんか、又疑もなく體育の事に注意せないからである、畢竟するに國か貧乏であるか故ょ、國民か體育、

教育、衛生に注意する餘裕無きょ由るなり。

軀幹は小なり、血色は衰へ、元氣も無く、實に見るに勝へざるは吾國同胞の有樣なり、斯の如くんは事業ょ、學問に、戰爭ょ到底歐州人と馳驅することは覺束なし、噫愛する同胞ょ爾等先づ其血色を復せょ、然らずんは出で、世界の舞臺ょ立つこと能はざらん。

世界の人種を大別すれは、肉食人種と、米食人種ならん、肉食の部とは歐米人ょして、米食の內には亞細亞人大部分を占む、而るょ此亞細亞人中にても、支那人は歐州人に讓らざる程肉食をなすが故に、躰格も比較的に好く、印度、波斯人も日本人よりは多量の肉食をなす、然るに吾國は四面海にして、比較的ょ海產物の多きょ、其國人の肉類を食すること少なきは何ぞや、試に田舍に至つて、人民の食物を見ょ、彼等は僅かなる餘

と少しの澤庵漬をコリコリやつて、僅かに腹を滿すにあらずや、かゝる粗食にて躰格の建全なる筈なし、去れど此れ人民の貧なるか故にして、彼等と雖も金錢よ餘裕あらば、肉を食して美味なるとは百も承知なるべし。

二節　日本は盲人國なり

政治家にも教育家にも實業家にも、一定の思想の標準なし、政治家は口を極めて支那問題を云々する、然れども其何の故に云々するやと問はゞ、其答ふる所は、實に文明國人よりもあるまじき殺風景な返答にして、或は分割すべしと云ひ、或は侵略すべしと云ふ、此を日耳曼帝か、支那をアマレク人種に比し、歐洲軍をイスラエルの神軍に比較したるに比して、其理想

果して何れか高尚なるや、更に教育家に向て、何の故に教育するやと問へ、彼等は曰く、君に忠を盡し、國を愛するが爲めなりと、彼等は教育を國家の附屬事業の如く思ふ、國家に必要あらば、個人は如何よなるとも可なりとは、即ち愛國教育家の口吻なり。

此をペスタロジーの＝吾は乞食の子を教へんが爲めに、乞食の如くなれり＝と云へるに比較して何れか高尚なるや、更よ轉じて實業家に問へ、何の爲めに金を得んとするやと、彼等は曰く、安樂を得んが爲めなり、而して其安樂と云へる文字中には忌しき、蓄妾、別莊、妾婢等の含まれあることを知るべし、此を歐洲の＝神は吾に金を得せしむ、去れば吾は神の爲めよ此金を使はざる可からず＝と云ふが如き、實業家よ比して何れか高尚なるや。

畧言すれば英國民には英國民統一の主義あり、日本國民には、日本國民統一の主義なくして、各人各種の異りたる主義を有す、此れ予の盲人と云ふ所以にして、國家の偉大ならざる所以なり。

三節　此貧乏國を奈何ん

豆に同じき小英國、しかも一度足を上げて、南亞の地よ闘ふや、兵を用ゆる六十餘万、而して毎月の六千万圓の軍資を送りて、國よ恐慌の來ることもなく、國民亦少しの痛痒を感ぜざるか如し、嗟呼英國の富實に無限なりと云ふべし、若し吾日本にして不幸英國の如きことに際會せんか、二三ヶ月にして破産なり、亡國なるべし、去れば富なくして兵を談ずるは空なり。

外國より見し日本の貿易

日本の貿易品として先づ指を屈するに足る者は

一絹類　生糸として織物として
一漆器
一磁器　裝飾物として
一茶　西洋人の嗜好に適せず
一竹細工　竹行季をも包む
一銅
一紙

以上六種は一に吾國の、財源にして、今予の見し素人考を記せば。

一日本の絹類

目下非常ゴ不評判あり、此れ日本絹業者の自業自得ゴして、彼等が商業道德を輕んじ、薄き絹に多くの糊を塗り、しかも其糊中にアンチモニーの紛を混じて、量目を僞りしが故に、外人皆二の足を踏んで、取引ゴ躊躇せり。

目下日本の絹類は如何なる、手續を踏んで、歐洲の流行界に入るやと云ふに、日本より出づる多くの羽二重又は生糸は、皆一度リヨン市に送られリヨンに於て、生糸は織られ、羽二重は染工の手ゴて流行の色に染められ而して後に、巴里、倫敦、伯林等各國の首府に送られて、万國の流行界を動かすに至る。

故ゴ日本今日の有樣は、リヨンの絹業者に其原量を供するのみ、而して其原量の價は甚だ安すきものあるが故に、倫敦巴里に賣買する絹布の市價

と日本の商人と外國人と取引する絹布の價との、價差は、即ちリヨン商人の手中に落ちるものにして、其利益實に原量絹類の三四倍なり、今其手續を示せば。

日本の絹類——五港外人——リヨン商人——歐洲流行界

即ち日本の絹は、横濱神戸の外國人とリヨン商人との、手を經て、流行界に行くものなるが故に、今日より日本の絹布業者は大奮發をなし、吾國ゴ一大染工所を起し、日本絹は日本にて着色し、日本人の手にて直輸出するとすれば今日外國人の占むる利益と、リヨン商人の占むる利益とは、共に吾國の收入たるを得べし、然るに茲に一大難關あり。

い、如何にして世界の流行につ組んか

此れ一大困難なり、去ど茲に妙案あり、他なし、テラーの應用是なり、

萬國の流行界を動かすものは、實に巴里倫敦邊のテラーなり、故に此テラーと連絡を通じ、彼等に比較的多くの利益を得せしめ、日本絹の周旋方を依頼する時は、彼等は三寸の舌にて各國の婦人を說き、却て日本は世界の中心たるに至らん。

ろ、着色の研究

日本の染工は決してリヨンのものより、劣れりと云にあらず、只恨むらくは光澤の無きこと是なり、故に完全なる染工を得んと欲せば政府は宜しく染工學校を設け、リヨン市より教師を雇いて、此が進步を計らざる可からず。

は、色と國民の關係、及歐洲人家庭の研究

同じく赤色と云と雖も、日本人の目にて見し赤色と、印度人の赤色とは異なれり、故に色と各國民の關係を研究して、隱微の嗜好に投ずるは要用なり、次は家庭を研究して家庭の必要に應ずるの必要あり。

若し以上記する所に注意して、斯業の改良を計る時は尙多くの利益を得られ得ると必然あり、去ども歐洲の伊多利希臘等の生糸業も、現今益々改良を加へつゝあれは、吾日本は於ても大に改良に熱心して、彼國に壓倒せられぬ樣注意せざる可からず。

二　漆器磁器

何れも好評あり、去れども此の如きは以て一國の財源となすに足らず、況んや奸智なる獨乙人は日本の贋造品を製造して、日本品を壓倒しつゝあるをや。

三　茶業

西人は綠茶を好まず、故に賣口少かし、歐洲人は錫倫又は支那茶を好む、而して日本茶を一名着色茶と云ひ、着色の爲めに、紅茶を一圓買へば、日本茶を十錢位買ふ風あり。

四　銅、美術品

以て國富の源泉となすに足るなし、記して茲に至れば、吾人は實に吾國の貿易に失望するものなり、唯僅かに希望をよするに足るは絹類あるのみ。

四節　滑稽的代議制

代議制其ものは決して滑稽的のものにあらず、唯此完全なる名目下に活動する、多くの代議士の滑稽的なるのみ、吾人は吾國の代議士に多くを

求めず、彼等に人類を愛せよと求むるも、彼等は何の意なるかを知らざるが故なり、唯彼等が眞に此日本を愛すれば吾人の願は足るなり、然るに彼等の眼光は、此よりも尙卑劣よして、日本帝國さえ愛する能ず（口では愛するとは云へ）自己の名聲、利達をのみ之れ事とするにあらずや。滑稽か否眞面目か、不忠か、噫斯の如き代議士を生ずる代議政体ならば、吾人は是れを求めざりしなり。

然り吾人は今云々せざるべし、吾人の欲する處は、斯の如きものならざればなり、去れば吾人は行て、萬國の同志と共に、且に天がソドムとゴモラに下またる火を地上に呼び下し、以て此土を灰塵となさん哉、噫有にして苦しませんよりも、寧ろ無にして混沌たらん哉。

五節　亂れたる男女の間

オイ君よい位の時には、結婚したがよからう、僕が相當なのを見つけてやらうか。

イヤ僕もから一人では万事不勝手であるから、君一つ細君を捜して呉れたまへ。

恰かも物品を求める樣に、生涯の伴侶たる、苦樂生死を共にせんとする妻を、今入用だからこれから取り寄せよう、一寸と一目見て、氣に入つたらオツと宜しいときめる風は、實に輕薄なる、吾國の東京に於ける、結婚の風なり。

殊に下等の方となれば、夜這なるもの大流行にして、口にするだも忌しき風なり、車夫、馬丁の結婚は、多く考なしの夜這より成立つものなり

此に反して英米に於ては、女子年頃に至れば、自由に青年男子と交際し男子が娘を訪問し來るも、母親は誰人なりやとの問ひさへせざる有樣は實に放任主義なるが如しと雖も、其間少しも亂れず、愛して戀に至らざる所は實に高尚と云ふべし。

六節　便所の壁

東京の下宿屋にて便所に入りて四壁を見よ、それはそれは、書てある書てある、口では形容の出來ざる、文字と畫が、一面に鉛筆又は爪などで記してあるを見ん、停車場の便所も然り、路傍の共同便所も然り、神田の帝國教育會の便所に至ては殊に甚し、而して此の如き醜業を記しある便所には、男も入り、女も入り、老も入り、少年も入るなり。

凡ゑ國民の如何に不眞面目なるかは、其裏面の光景を見て明なるものなり、吾帝國至る所の便所の、斯くの如く姪風に滿つるは明かに、其國人の思想を表白して餘りあり、試に英國ゑ至つて便所に行け、實に千百の便所を搜索するとも、一文字又一畫の記されざるを見るべし、彼等の眞面目なる斯の如き滑稽は良心ゑ恥ぢて爲し能はざるなり。

暗黑の倫敦 終

明治三十六年六月五日印刷
明治三十六年六月十一日發行

暗黑の倫敦
定價金三十錢

著者　田野橋治

著作權所有

發行者　大倉廣三郎　京橋區桶町二十一番地
印刷兼發行所　同　大倉隆四郎

發行所　京橋區桶町二十一番地　廣文堂書店

發賣所
大阪　大久保田丁　大久保田丁　大倉書店
神戸　二丁目　銀座　服部書店
京都　一條通　寺町　辻本書店
日本橋通　南町　前川書店
吉岡書店

東京　名古屋　本町通　松田書店
仙臺　廣瀬通　川瀬書店
仲町　二丁目　積善館書店
兒玉　谷本　長崎書店
郡山　新町　吉田書店
福島　本町

越後長岡　目黑書店
四日市　高藤書店
大阪　四ノ宮　西澤書店
長崎　大門町　菊竹書店
熊本　久留米市　魁文館
米屋町
宋町館

16/11/36

東洋雄辯會編纂新版

東洋雄辯演說集

菊版全一冊　正價金二十五錢　郵稅金四錢

雄辯會は當世知名の辯士が組織せる學會にして政治、社會、宗教、文學の各方面に於ける。大石正己。大隈重信。其他數名、各其特獨の見地より來れる思想を公表する一種の學會なり。本書は即ち此の本會に於ける演說を蒐集したるものなり

依田學海先生序
義士實談大王信夫恕軒先生新著
義士實談二百年祭紀念

赤穗義士實談

洋裝美製全一冊紙數四百頁正價金五十五錢郵稅金八錢

題して赤穗義士實談といふ著者の實談頗る斬新にして風に世の稗說を駁す抑も赤穗義士の事蹟は本朝千古の美談たり隨つて昔へより演劇に浄瑠璃に新聞に稗史小說に將た講談に仕組まれて走卒兒童も又よく是を知る而かも其の稗史小說たる概ね牽强附會事實に錯誤多く若くは荒唐無稽の物語にして到底士君子の讀むに堪ふるものなし明治の碩儒信夫恕軒君茲に見るあり曠世の一大事蹟をして徒に稗官野乘家の手に戲弄せしむるを慨し親しく義士の事蹟に就て探討し博採旁引以て其の關係を詳かにし之を行るに翁が排獨の快辯を以てす。赤穗事件の片々悉く生動し義士銘の面目躍然二百年前の出來事眼の當り見るがごとし
●義士の著者多しと雖皆略說にして其實を得ず本書は全くの實談也

米國文學博士松本君平著

春風秋雨錄

大新版洋裝美製全一冊　金三十錢　郵稅六錢

▲花に對して泣き月を抱て淚あり、多情多感は蓋し英雄豪傑の本領なりとかや、貴氏松本君平氏に頃米新著あり、名づけて春風秋雨錄と云ふ　收むる處にり氏が過去三十年間事に觸れ物に感じての設鋒配求文わ魂、敍事文あり「論文あり又小說あり　久能山に家康の廟を追懐しては吾れ久能山上、寂淚たる松柏の醉れる下、三百年前英雄牛死慣な見て其人の淵来遺跡を追想して却て今ま吾れも生落朗　事業の見るべきものなく　功業の世に誇るべき英のなし」と慨し　今川義元の墓に詣でては一此失敗せるる雄墳墓の地を問へば　草山磐咽んで、英雄の末路を吊す」ものい如しと泣き、長眞川に遊び艶匠の妙技を見ては「一天下の英雄を操縱する事　又此の如くならざるべからず」と感ず　全篇悉く熱血の文字筆力雄健行文又流麗讀者をして感慨措く能はざらしむ　居常シーゲルを以て自ら任ずる家傑若平氏の如きに非ずんば何ぞ多情多感這般の着あるの大好評を得たり

大審院判事法學士　馬場愿治君校訂
退職判事公證人　山田久備君著

公正證書作成詳解

全一冊　金十五錢　郵稅二錢

文學博士　小杉榲邨先生校訂
跡見女學校舍監　跡見李子先生題字
高等女學校　齋藤梅子女史著
高等女學校及同程度女學校參考書

記事 消息　女子文のはやし

第十八版、製本優美高尚全一冊　金三十八錢　郵稅六錢

女子記事文略目次
春之部　夏之部　秋之部　冬之部　雜之部

日用書翰文種類略目次
祝ひの文　請求の文　謝禮の文
慰問の文　報知の文　羈旅の文
招待の文　誘引の文　哀悼の文
依頼の文　音物の文　忠告の文
右の文數百二十餘題

女子の文範として良書に乏しきは女子教育の缺陷と謂はざるべからず本書は曾て高等女學校に在りて文章の秀逸をもつて稱せられ即ち其述作は內國又は海外の諸學校にまで模範として贈られ或は新聞雜誌に迄揭載せられたるが如き最文藻に富み最文才に長じたる齋藤梅子女史が手に成り多年の間篋底に秘せられし中につき其華を拔き其秀を採りたるものにして加ふるに小杉文學博士が親しく筆を採りて詳細なる校訂に日子を投されければ愈益々光を添へぬ女史に之を公にすることを留まれざりしを女子敎育に稗益する所あらしめんとて當肆に請ふて出版することゝなりぬ實に本書は其事項の適切なるのみならず敍述の流麗なる一度之を繙かば興味津々卷を掩ふことを忘るゝに至らん殊に現今普通に行はるゝ所の日用書翰往復通信の文を書くときは實用簡明に何人にも能くわかりやすし又女子記事文の如きは目下高等女學校にて敎授せる程度に當て巧妙佳絕美文を以て作り品位を高め世の才媛女學の徒が一日も座右に缺くべからざるの珍書たるを疑かはず

米國文學博士　松本君平著

米風歐雲錄

洋裝美製全一冊　正價金二十五錢　郵稅金四錢

時剛に初夏に際す、爛熳たる櫻花は果なく散りて、藤花薔薇、躑躅菖蒲、將に相尋て開かんとす。此佳辰尊き暗劍殘忍、去て西歐萬里觀光の客となるもの。豈多少其懷に黯然たるなきを得んや、然りと雖ども、男兒生れて凌霄の志なく、未だ遊ぶに由なくして、却て米風吹く處、歐雲の湧く邊、漫に異境絕域に放浪す、而かも尚斯一片耿々國を思ふの念、臥寐も忘るゝ能はず、盡し斯行、更に大に國家生民の爲めに盡す所あるを期すればなり。徒らに西歐皮相の文明に心粹するものならんや、然れども、世界文明の大潮流に投じ國民的生存競爭の大途に驅逐し、坤輿上に國を建つるの道を求めんには即ち必ずや十九世紀文化の實相を視し古往今來、國家の榮枯消長する所以、國家の隆替興亡する所以の因を究めざるべからず、此行吾儕が潜心して研鑽一番すべき問題豈に他あらんや、嗚し夫れ世界的大眼孔を以て觀じ來れば彼の東歐希土の戰雲の如き即位六十年の祝祭の如き固と是れ蝸牛角上の成敗利鈍のみ、桃安閑窓の一榮華のみ、吾儕深く關心する處に非る也。